

Iconographical Material for the Study of Tantric Buddhism in India (1) : The Sādhanas of Simhanāda Avalokiteśvara in the Sādhanamālā

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間, 留理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004285

インド密教の図像学的資料(1)

——『サーダナ・マーラー』における獅子吼観自在の成就法——

佐久間 留理子*

Iconographical Material for the Study of Tantric Buddhism in India (1):
The *Sādhanas* of *Siṃhanāda-Avalokiteśvara* in the *Sādhanamālā*

Ruriko SAKUMA

This paper presents an annotated Japanese translation of the *sādhanas/dhāraṇī* of *Siṃhanāda-Avalokiteśvara* which appear in the *Sādhanamālā*, a Buddhist text on the iconography and ritual of Tantric Buddhism.

Part 1 explains the historical background of the *sādhana*: (1) the changes in the iconographic features of Buddhist deities, (2) the depiction of the deities in India, and (3) the rituals and visualisation connected with Indian deities and cosmology.

Part 2 describes the textual sources for the Sanskrit and Tibetan texts edited in parts 5 and 6. The Sanskrit text is based on B. Bhattacharyya's edition of the *Sādhanamālā* (Baroda, first edition 1925), Nos. 17, 20, 21, 22, 23 and 25, and on seven manuscripts (Tokyo University [MATSUNAMI 1965: Nos. 451, 452, 453, 454]), Kyoto University [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: Nos. 119 and 120] and National Archives, Kathmandu [Bṛhatsūcīpatram Vol. 39: No. 3–387]). The Tibetan text is based on the Peking and the sDe dge editions.

Part 3 describes the iconographical features of *Siṃhanāda-Avalokiteśvara* and the process of visualisation in his *sādhanas*.

Part 4 presents an annotated Japanese translation of the *sādhanas/dhāraṇī* Nos. 17, 20, 21, 22, 23 and 25 of the *Sādhanamālā*.

Part 5 provides the Sanskrit text of these sections.

Part 6 presents the Tibetan text of the same sections.

* 東海仏教学会，国立民族学博物館共同研究員

1 成就法成立の背景	Nos. 22, 23 獅子吼觀自在成就法
1.1 はじめに	No. 25 獅子吼觀自在成就法
1.2 仏教の諸尊の図像学的変遷	5 サンスクリットテキスト
1.3 神、及び尊格の姿についての関心	No. 17 獅子吼觀自在成就法
1.4 供養と観想	No. 20 獅子吼觀自在成就法
1.5 世界（宇宙）観	No. 21 獅子吼觀自在の陀羅尼
1.6 まとめ	Nos. 22, 23 獅子吼觀自在成就法
2 『サーダナ・マーラー』のテキスト研究	No. 25 獅子吼觀自在成就法
3 獅子吼觀自在の成就法と陀羅尼	6 チベット語テキスト
略号	No. 17 獅子吼觀自在成就法
凡例	No. 20 獅子吼觀自在成就法
4 和訳と訳注	No. 21 獅子吼觀自在の陀羅尼
No. 17 獅子吼觀自在成就法	Nos. 22, 23 獅子吼觀自在成就法
No. 20 獅子吼觀自在成就法	No. 25 獅子吼觀自在成就法
No. 21 獅子吼觀自在の陀羅尼	

1 成就法成立の背景

1.1 はじめに

インドにおいては周知のごとく、バラモン教やヒンドゥー教等において多様な神々が生み出された。また、仏教においても時代が下るにつれ、仏、菩薩などの様々な諸尊が出現した。これらの神々には、何等かの姿、形をもつと考えられていたものもあれば、そうでないものもある。何等かの姿、形をもつと考えられていたものには、具体的に絵に描けるような姿、形をもつものと、もたないものがあった。さらに、前者の具体的な姿、形をもつものの中にもイコンのごとく外的に表される場合と、観想などにおいて内的に表される場合とがあった。これらの表し方の中、ここでは特に姿、形を内的に表す方法である、成就法（サーダナ、sādhana）を取り上げる。それについての詳細を述べる前に、このような実践方法が、インドにおいて歴史的にいかにか形成されてきたのか、そのあらましについて仏教を中心にまとめておきたい。

1.2 仏教の諸尊の図像学的変遷

仏教において、仏は元来、菩提樹のもとで悟りを開き、輪廻より脱した、歴史上の釈尊と深く結び付いていた。しかし、釈尊の入滅後、歴史的な仏は理想化、普遍化さ

れ、過去七仏や阿弥陀のごとき、現実の時間や空間を超越した仏が信仰されるようになった。また、肉体としての身体をもたず、仏法そのものである、普遍的な身体 (dharmakāya, 法身) も考え出され、密教においては大日 (Vairocana) のごとき、人格化された宇宙の統一原理としての仏¹⁾、即ち、世界としての仏が出現した。そして、この大日を中心にして、阿閼 (Akṣobhya)、宝生 (Ratnasambhava)、阿弥陀 (Amitābha)、不空成就 (Amoghasiddhi) を加えた、いわゆる五仏が形成された。

このように仏に対する考え方が発展すると並行して、仏以外にいくつかの諸尊のグループが現れた。とりわけ大乘仏教の興隆にともない、菩薩といわれる一群の諸尊が数多く出現した。菩薩は元来、仏になる前の釈尊のことであったが、大乘仏教では、仏になることを誓願すれば誰でもがなり得るものとなった²⁾。さらに、慈悲を具現する観自在など、各々の職能をもった菩薩が現れ、仏にかわって積極的に活躍して、仏と衆生を堅固に結び付ける存在となった。

密教においては、仏の世界を守護する諸尊のグループとして忿怒尊が台頭してきた。それらは、武器である金剛 (vajra) を手をもって釈尊を守る、金剛手 (vajrapāṇi) の性格を基盤とし、後にヒンドゥー教のシヴァ神に大いに影響され、破壊力を象徴する三戟や髑髏などの要素を吸収して成立したとされる³⁾。特に血を入れた髑髏の器のごとく、バラモン教では避けられてきた<血>という要素が忿怒尊を中心に取り入れられた。また、ヒンドゥー教の興隆にともない、女神崇拜が盛んになったが、仏教においてもターラー (多羅) などの多くの女神が台頭し、密教においては仏も女神の妃をとるようになった。

上述した諸尊以外にも、それほど有力ではないが仏教の底辺を支える神々が生まれた。それらは、九曜 (太陽、月、惑星) などの天体が神格化されたもの、四天王、龍神などの神々であり、ヒンドゥー教の世界との緩衝地帯を形成するようになった⁴⁾。

このように、仏、菩薩、忿怒尊、女神、その他の神々という、諸尊の組織体 (パンテオン)⁵⁾が、仏を頂点として形成されるようになった。これらの諸尊は、各々の機

1) 金岡 [1969: 165] は、「大日如来の基本的な性格が、絶対的な統一原理の人格化と、その無限な具象化という二つの性格に尽きる」と述べている。

2) 静谷 [1987: 238] には、『原始大乘』の主軸となる思想は、釈迦菩薩のような特定の菩薩だけを考えるのではなく、誰でも作仏の誓願を起して菩薩の道に進めれば、その人は菩薩であり、将来必ず作仏できるとする『凡夫の菩薩』の思想である」と述べられており、誓願すれば誰でも菩薩になり得るとする思想の出現が指摘されている。

3) 小林 [1951: 65] は、執金剛 (vajrapāṇi, 金剛手) が後に、善相と悪相の二つに分化し、悪相において、シヴァ神と結合して、いわゆる忿怒部の諸明王を形成するようになったと指摘している。

4) 立川 [1987b: 134]。

5) 立川 [1987a: 338]。

能、性格を有し、人格神としての様相を帯びている。これらは、世界と結び付けられ、また、姿、形をもつようになり曼陀羅を構成する諸尊としても発展するのである。以下、これらの諸尊を「尊格」と呼ぶことにする⁶⁾。

1.3 神、及び尊格の姿についての関心

次に、バラモン教の神や仏教の尊格は、その姿、形についてどの程度関心がはらわれていたのかを述べておこう。

バラモン教において神々は、何等かの姿、形をもつものとして述べられることがあった。例えば、神像の売買が行われたのではないかとされる記述も残されている⁷⁾。しかし、インドラ神が、ある時は、天空を覆うと言われ⁸⁾、ある時は牡牛と言われるように⁹⁾、神々は、全体的な傾向として、絵に描けるような具体的な姿、形をもつことはなかったと考えられる。例えば、バラモン教のシュラウタ (śrauta) 祭式では、神の力の「姿、形」(rūpa)、あるいは「写像、似姿」(pratimā) であるかのように祭具を使用することはあったが¹⁰⁾、神そのものを偶像として直接的に表現することはなかったのである。

仏教においては、当初、仏の教えが至上のものであり、たとえ仏の姿であっても、外的にしる内的にしる、執着の原因となる形として表すことは避けられるべきであった。しかし、釈尊の入滅後、ストゥーパ (仏塔) のように仏の悟りを象徴するものが造られ、さらには、サーンチーやバールフトのストゥーパの塔門の彫刻にみられるように、菩提樹などの象徴表現によって仏が表されるようになった。そして、紀元1世紀頃になるとガンダーラにみられるような人の似姿をもった仏が表現されるようになった。前節 (1.2) でも述べたように、釈尊の入滅後、時代が下るにつれ、様々なかたちで諸尊が発展していくのであるが、それらは外的な姿、形によっても表されるようになり、その性格、属性はさらに強調されていった。そして、このような諸尊の姿、形の表し方は、供養や観想などの行為と深くかかわり合いながら変化していったのである。

6) 仏教における諸尊の展開については 頼富 [1989a: 79-81] に総括されている。その中で「尊格」という用語が用いられており、それにならった。

7) *Rig Veda*, IV, 24, 10. 辻 [1983: 160]。

8) *Rig Veda*, I, 61, 8, 9. Griffith [1896: 83]。

9) *Rig Veda*, II, 12, 12; IV, 23, 7. 辻 [1983: 155, 157]。

10) 井狩 [1989: 59-60]。

1.4 供養と観想

供養 (pūjā) は、神に対し、あたかも客人をもてなすように、水や食物等の供物を捧げ、神からは何等かの利益を得るという行為であり、ヒンドゥー教において大いに発展した¹¹⁾。このような行為は、元来、執着を捨て、悟りを求める仏教にとって不要なものであった。しかし、釈尊の入滅後、仏塔崇拝が行われるようになり、やがて、バラモン教以来の儀礼主義を復興し、土着的要素を取り込んで成長してきた密教において、盛んに行われるようになった。供養は、仏像等の外界に存在する「物」に対しても行われていた。しかし、仏教徒、とりわけ大乘仏教の宗教的エリートにとっては、哲学的立場上、外界に「物」が存在することに対する抵抗もあり、尊格の姿、形を内化したかたち(観想)で供養するようになった。そして、尊格の姿を観想する実践方法が行われ、さらには、観想した尊格の姿、形と自己(実践者)とが一体であると体得する実践方法が現れた。

このような流れの中で、尊格の姿、形を観想する、あるいは、それと一体化するという実践方法、即ち、成就法が形成されたのである。これは精神集中を要する技法であり、この点ではインドにおいて古来継承されてきたヨーガ (yoga) の伝統を取り入れたものといえることができる。

バラモン正統学派の一つ、ヨーガ学派の根本教典『ヨーガ・スートラ』には、ヨーガは、心の作用の止滅であると述べられている。一方、成就法においては、心の作用はむしろ活性化させられ、実践者の意識は姿、形の出現、収縮、拡大にともない動きまわる。従って、この点において、成就法は正統派ヨーガと対象的なのである。

成就法において、さらに重要な点がある。それは、観想された姿、形がひとまとまりの閉じられた世界としての意味をもつという点である。この閉じられた世界は、インドにおける世界観と深いつながりがあるので、次にそれについて述べておこう。

1.5 世界(宇宙)観

アーリア人によって担われたバラモン教は、祭式を至上とする宗教であった。祭官は神を讃え、供物を捧げることにより、神から恩恵を得ることができた。このような神と人との関係においては、当然のことながら、当初、世界の構造に関して関心がはられることはなかった。しかし、時代が下るにつれ、世界(宇宙)の創造や構造について意識されるようになる。『リグ・ヴェーダ』の「宇宙開闢の歌」(X. 129)には、

11) ヒンドゥー教の一般的な儀礼の一つに *ṣoḍaśopacārapūjā* がある [立川 1983: 105]。

この宇宙は絶対的の唯一物が根源となって展開したと述べられている。ここでは、世界の構造については述べられてはいないが、一つのまとまりのある現象界、即ち、世界が意識されているのである。

仏教においては、世界の存在、あるいは、その構造についても当初、関心がはられなかった。しかし、後世、アビダルマの哲学書『俱舎論』にみられるように、世界についての精密な体系が構築されていった。例えば、須彌山 (sumeru) を中心にして、その周りに人間が住む大陸などの大小の陸地や山脈が存在するという世界のモデルが作り上げられたのである。

このような、一つのまとまりのある、具体的な構造をもつ世界モデルが、密教においては、諸尊が配置される容器として取り入れられた。この諸尊が配置された世界(曼陀羅)は、内化された姿、形として観想され、さらには、観想者と一体化されるものとなった。成就法によっては、蓮華などの上に一つの尊格のみが観想されることもあったが、その姿、形は一つのまとまりのある閉じられた世界として意識されていた。この閉じられた世界は実践者によって、日常、実践者を取り囲む世界とは次元の異なる空間として設定されていたのである。

1.6 ま と め

成就法は、以上述べた様々な要素が複雑に絡み合って形成されていった。この過程で特筆すべき変化は、神 (devatā) とも呼ばれる尊格が、実践者 (人) と同化するようになり、それによって実践者 (人) は、一つの閉じられた新しい世界の中心に、自己を再生することが可能になったという点である¹²⁾。

2 『サーダナ・マーラー』のテキスト研究

ここで取り上げるテキストは、インドにおいて紀元12世紀頃までに¹³⁾各々個別に成立し、流布していた成就法 (sādhana)、陀羅尼 (dhāraṇī) 等¹⁴⁾ が、成就法を中心に

12) 以上の叙述は、立川 [1987a: 336-341, 1989: 289-314] に負うところが大きい。

13) 奥山 [1988: 891] は西暦十二世紀頃にBに近い形のテキストが成立していたとは断定できないと述べている。その理由として、従来、SMの編纂年代の根拠となってきた写本はNepal Samvat 287 (西暦1167年)の写本(ペンドール目録 Add. 1686)であるが、この写本はBにある成就法の半数以下しか含んでいないという点をあげている。

14) 成就法の次第 (sāghanavidhi) あるいは次第 (vidhi) と呼ばれるものもある。

『サーダナ・マラー』(*Sādhnamālā*, 成就法蔓) (略号: SM) 等¹⁵⁾のタイトルを付けられ、一つにまとめて編纂された¹⁶⁾文献である。「サーダナ」(成就法, *sādhana*) は、字義通りには「生ぜしめること」であり、ここでは、尊格の姿を精神集中によって生ぜしめることを意味する¹⁷⁾。成就法において、実践者は尊格の姿を生ぜしめるが、さらには、観想した尊格と一体化する場合もある¹⁸⁾。いずれにせよ、成就法は尊格の姿、形を用いたヨーガ (*yoga*) ということができよう。

さて、このテキストとして、現在、三十数本のサンスクリット写本が知られているが、それらについては奥山 [1989: 384–385], 佐久間 [1990] に述べられているので、ここでは省略したい。サンスクリットの標準的テキストとしては B. バッタチャルヤの校訂本 (略号: B) があり、それらには全部で312の成就法、陀羅尼等が収められている。これらは、如来、菩薩、女神、忿怒尊等¹⁹⁾の成就法から構成されている。この研究では、これらの中で、特に、観自在菩薩の成就法、儀軌、陀羅尼の和訳とサンスクリット・チベットテキスト校訂をすすめる。

Bの観自在菩薩の成就法等には、次の観自在²⁰⁾が説かれている。それらは、六字観自在、空行観自在、獅子吼観自在、世間主、世自在、ハーラーハラ観自在、蓮華舞自在観自在、ハリハリハリヴァーハナ観自在、三界制御観自在、赤観自在、青頸観自在、幻網観自在、スガティサンダルシャナ観自在、プレータサンタルピタ観自在である。ここでは、これらの中からBの Nos. 17, 20, 21, 22, 23, 25 における獅子吼観自在の成就法と陀羅尼を取り上げ、それらの内容の解説と翻訳、訳注、サンスクリット・チベット訳のテキスト校訂を行う。サンスクリットテキストの校訂には、底本として

15) この他、*Sādhanaśamuccaya*, *Sādhnamālātāntra*, *Sādhanaśāntra*, *Sādhnamālāpañjikā sahitā*, *Sādhnamālā-tathā-dhāraṇī*, *Sādhnamālāpañjikā*, *Sādhnamālāprathamakaṇḍaḥ* の名称が知られている [佐久間 1990: 91]。

16) 奥山 [1988: 889–890] は SM のチベット語訳 *sGrub thabs brgya rtsa* (北京版 Nos. 3964–4126) のコロフォンの記述 (北京版 Vol. 80, fol. 338a3–6) を根拠として、このチベット語訳の原本となったサンスクリットテキストが *Abhayākaragupta* によって校訂、編纂されたと述べている。Schieffner [1963: 330–331] は、*Thob jig* に *Abhayākaragupta* の著作の一つとして *Sādhanaśāgara* (*sGrub thabs brgya rtsa*) が記述されていると述べている。なお、*Vistrikov* [1970: 199] は *Thob jig* がチベット伝記文学の総称であると述べており、*Schieffner* [1963: 330–331] の言う *Thob jig* が具体的に何を指すのか特定できない。

17) 立川 [1986: 67]。

18) 主に、尊格の姿と真言だけを記すように、内容が簡略化されて述べられた成就法には、実践者と尊格との一体化が述べられていないことが多い。しかし、尊格の姿や真言以外に内容が詳しく記された成就法には、多くの場合、実践者と尊格との一体化が述べられている。

19) 頼富 [1982: 121–123] は SM の諸尊を大きく種類別に整理して 1. 如来 2. 菩薩 3. 明妃 (女尊) 4. 守護尊 5. 護法尊 6. 雑尊に区分している。

20) SM では、「観音」(*Avalokitasvara*) のかわりに「観自在」(*Avalokiteśvara*)、「世自在」(*Lokeśvara*)、「世間主」(*Lokanātha*) という語が用いられている。「世自在」、「世間主」が単独で用いられる以外は「観自在」という訳語で統一した。

Bを使用し、東京大学所蔵の四本のサンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: Nos. 451-454], 京都大学所蔵の二本のサンスクリット写本 [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: Nos. 119, 120], ネパール国立考古局内文書局所蔵の貝葉のサンスクリット写本 [*Nepālarājakīya-Vīrapustakālayasthapustakānām Bṛhatsūcīpatram* Vol. 39: No. 3-387] によって校訂した。チベット訳の校訂には、デルゲ版を底本とし北京版によって校訂した。なお、各テキストの該当箇所については凡例を参照されたい。翻訳に際しては、該当テキストの一部の翻訳、あるいは解説を含む Grünwedel [1900: 130], Foucher [1905: 31-34], Mallmann [1948: 50-51, 183-191], Bhattacharyya [1968: 127] を参照した。

3 獅子吼観自在の成就法と陀羅尼

観自在²¹⁾ (Avalokiteśvara) は、大乘仏教において最も人気のある菩薩である。菩薩 (bodhisattva) は「悟り」(bodhi) に対して、「勇気」(sattva) をもつものを意味し、元来は成道前の釈尊を示す言葉であった。しかし、大乘仏教においては、自己の悟りのみを求めるだけでなく、むしろ衆生の救済を目的として活動し、仏と衆生を結び付ける存在となった。菩薩には、文殊 (Mañjuśrī), 彌勒 (Maitreya) なども知られているが、観自在は、特に慈悲 (karuṇā) を具現する菩薩としてインドをはじめ、ネパール、チベット、日本などで信仰を集めた。観自在はこのような性格を表現するために、様々な姿として分化し、多くの種類の観自在が発展した。SM にはとりわけインドの後期密教で発展した観自在が収められている。

さて、ここで取り上げる観自在は、獅子吼観自在(世自在) (Simhanāda-Avalokiteśvara, Simhanāda-Lokeśvara) といい、その名称は獅子の鳴き声 (Simhanāda, 獅子吼) を意味する²²⁾。Mallmann [1948: 186] は、「ライオンの吠え声によって世界を制するもの」を意味するとしている。しかし、獅子がしばしば、釈尊の例えであ

21) 岩本 [1978: 207-209] によれば、「観自在」(Avalokiteśvara) という語は「観」(avalokita) と「自在」(īśvara) とが複合してできたものであり、この語が全体として「見ることの自在な者」を意味すると解釈している。また、Avalokitasvara というサンスクリット語も存在し、これが「観音」に対応すると述べている。

22) Simhanāda を「獅子の吠え声をもつもの」というように、所有複合語として解釈することもできる。しかし、『維摩経』には「獅子吼」(Tib. *Señ ge'i na ro mñon par bsgrags pa'i dbyaṅs*) が菩薩の名称として記されている (大正蔵 No. 475, Vol. 14, p. 537b; No. 476, Vol. 14, p. 558a) [大鹿 1970: 146]。長尾・丹治 [1974: 10] の和訳ではこれを「獅子吼し響かせる声」と解している。

るように、この名称は釈尊の説法がライオンの声のごとくとどろき、人々を教化する観自在のことを意味していると考えられる²³⁾。

この観自在の尊容は、SM (B) の Nos. 17, 20, 22, 23, 25 の成就法に説かれており、No. 17 の成就法には次のような姿が述べられている。

「全身が白く、一面二臂で、三眼をもち、髪髻冠をつけ、頭に阿弥陀の化仏をつけ、獅子座において輪王坐で坐し、虎皮の衣をまとい、五つの如来が[回りに]広がり、肩に揺れ動く五つの紐を付け、半月によって飾られている。左手にある白い蓮華の上に白い剣があり、その近くに、白い蓮華の様々な良い香りのする花で満ちた白い頭蓋骨がある。〔観自在の〕右側には、白い蓮華の上に白い蛇の巻き付いた白い三戟がある」

以上のような姿を行者(実践者)は自らの心臓の月輪(月の円盤)上にある、フリーヒの文字を変化させることによって観想する。これと同時に、その姿をもつものが自分と一体であることを冥想する。

従来の研究によれば、この尊の尊容には、ヒンドゥー教や仏教の他の菩薩から取り入れられた特徴が認められるとされている。例えば、三つの眼、虎皮の衣、頭蓋骨、蛇の巻きついた三戟、半月といった特徴は、シヴァ神から取り入れたものと考えられる [MALLMANN 1948: 187]。また、乗り物である獅子、肩にはためく五つの紐、剣は文殊(Mañjuśī)より取り入れられたものであると考えられ [MALLMANN 1948: 190]、尊容の折衷的な性格がみとめられる²⁴⁾。シヴァ神からの影響は、当時インドにおいて興隆したヒンドゥー神(特にシヴァ神)の力を仏教側が取り込もうとした表れである。

この尊の作例はインドをはじめ、ネパール、チベット・中国にみられる²⁵⁾。これらの中、年代が比定されている作例には [町田 1968: pl. 86]、11世紀に比定されている作例 [BHATTACHARYYA 1968: fig. 99]²⁶⁾、11-12世紀に比定されている作例 [FOUCHER 1905: pl. XIV; MALLMANN 1948: pl. XIII; HUNTINGTON 1984:

23) 中村 [1988: 313] の「獅子吼観音」(ししくかんのん)の項を参照。

24) Foucher [1905: 31] は、この尊が文殊から乗り物の獣(獅子)と剣を、観自在から、その体の色である白色と頭蓋骨と蛇の絡んだ三戟を借りた神であると述べている。Poussin [1909-1953: 260] は、この尊の姿は、シヴァ神との結合が顕著であり、獅子に坐し本と剣をもつ文殊とも混交したものであると解説している。Getty [1962: 60] は、この尊が、観自在と文殊との形をあわせたものようであると説明している。Zimmer [1984: 181] は獅子をトゥルガー女神から取り入れたものであると述べている。

25) 訳注27参照。

26) 宮治昭氏(名古屋大学助教授)所蔵の写真によれば、所蔵博物館の説明に 11C と記されている。

pl. 155] (いずれもインドの作例) がある。

さて、獅子吼観自在が、成就法において表される過程をまとめ、若干の説明を加えておこう。

(1) 準備段階として、行者は洗顔などをなし (Nos. 17, 20, 22, 23), 心地の良い場所 (No. 17) や清らかな地面 (No. 25) などに安楽な坐 (Nos. 17, 20, 22, 23, 25) で坐すことが記されている。

(2) 行者は自らの心臓に (Nos. 20, 22, 23, 25), 観想の「場」として月輪等を観想し、その上にフリーヒなどの種子 (文字) を観想する。この段階では行者の意識は種子に集約されていく。そして、(3) の段階では、種子より発せられた光によって師や仏や本尊が行者の現前に引き寄せられる。この過程は、(2) の段階で種子に集約された意識が光とともに拡散し、再びまいもどってくることを示していると考えられる。

(4) 供養や懺悔など (Nos. 17, 22, 23, 25) をなし、「オーム、私は空性という智金剛を自性とするものである²⁷⁾」と真言 (mantra) を唱え、空性を加持 (聖化) (Nos. 17, 20, 22, 23), あるいは、修習する (No. 25)。これらは自己浄化の行為であり、また、智金剛という知恵の堅固なる本質を行者が本来もっていることを確認する行為でもある。

(5) 再び種子を観想し、蓮華 (Nos. 17, 22, 23, 25) あるいは月輪 (No. 20) に変化させる。また、その上に、種子を観想し変化させて、蓮華を観想し (No. 20), さらにその上に、観自在の乗り物となる獅子を作り上げる (No. 17, 20, 22, 23, 25)。そして、獅子の上に蓮華 (No. 17), 月輪 (Nos. 20, 22, 23, 25) を観想し、その上にフリーヒという種子を観想する。この過程では、下方の蓮華の台座から獅子へ、そしてその上の種子へと段階的に観想していく。

上述したところの(2)から(3)までの段階は、内的な閉じられた一つの世界を作り上げる過程である。

(3)の段階で、師や仏や本尊が行者の現前に引き寄せられると記されており、この段階では、自らの心臓の上に設定された内的な世界とは異なる、自己の外側の世界がある程度行者に意識されていることが分かる。

(6) Nos. 17, 22, 23 の成就法の記述に従えば、(5)の段階で最後に観想した種子が獅子吼観自在の姿に変化すると同時に、行者と本尊の姿とが一体化すると考えられ

27) 訳注11参照。

る²⁸⁾。No. 20 の成就法の記述では、本尊の姿は観想するが、行者と本尊の姿とが一体化することは述べられていない。No. 25 の成就法の記述では次のように述べられている。行者は(5)の段階で最後に観想した種子の光によって、如来を引き寄せ、自らにそれらの一切の如来を入れて後、自分自身が獅子吼観自在の姿をもつものと観想する。そして、心臓の種子（種子より発する光）によって、智薩埵(jñānasattva)²⁹⁾を引き寄せ、自らに入れて、如来を遍満させ、自らを灌頂（聖化）すべきであるとしている。このような(6)の段階の記述の中でも、とりわけ No. 25 の記述からは、行者の意識が種子に集中して後、意識が光とともに拡散し、再び行者の側に如来や智薩埵とともにまいもどる過程がみとめられる。

この(6)の段階において、本尊と行者が一体化する過程は、行者が、自らの心臓の上に設定した世界の中に、入り込む過程でもある。この行為によって、行者は、一つのまとまりのある閉じられた新たな世界の中心に自らを置き換えることができると考えられる。

(6)の段階を終えた後、観想より起きる際に、「オーム、アーハ、(フリーヒ)、シンハナーダ、フーム、パト、(スヴァーハー)」などの本尊の名の入った真言を唱える。

(7) 成就法を終えた後、Nos. 17, 22, 23, 25 の成就法では病気を治療するための行為を行う。それは次のようである。地面に落ちていない(直接、牛の肛門より取った)牛糞に真言を唱え、八つの曼陀羅を作る。そして、その曼陀羅に陀羅尼を唱え、曼陀羅に塗った残りの牛糞を陀羅尼で七回清め、病人に塗る。このような行為は No. 21 の陀羅尼にも記されている。

以上が、獅子吼観自在の成就法と陀羅尼の要旨である。

SM の記述は、行者が観想の覚え書きとして作成したものである。従って、彼らにとっては当然のこととして、あるいは、師から弟子へと口伝されるものとして内容が省略されることが多々ある。テキストにこのような性格があるとはいえ、ここでは、テキストの記述に則し、観想における行者の内的な世界の動きを再構成することに努めた。

28) No. 17 の成就法には「…そ [の白いフリーヒの字] を変えて、獅子吼 [観自在] の姿をもつものを自分自身であると見るべきである」と述べられ、その後本尊の尊容が記されている (No. 17 訳文中の (2.2.1))。また、Nos. 22, 23 の成就法には「…フリーヒの文字より生じた、獅子吼観自在の姿をもつものを自分自身であると瞑想すべきである」と述べられ、その後、本尊の尊容が記されている (Nos. 22, 23 訳文中の (2.2.1))。これらの言語表現に従えば、本尊の姿が種子 (文字) から変化する、あるいは、出現することと、行者が本尊の姿と一体化することとは同時であると考えられる。

29) 訳注105を参照。

略 号

- (1) SM: *Sāghanamālā*
- (2) SM のテキスト校訂に使用した校訂本と写本は以下の通りである。
 B: *Sāghanamālā* (B. バッタチャルヤによる校訂本)
 S1: 東京大学所蔵サンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: No. 451]
 S2: 同上 [MATSUNAMI 1965: No. 452]
 S3: 同上 [MATSUNAMI 1965: No. 453]
 S4: 同上 [MATSUNAMI 1965: No. 454]
 S5: 京都大学所蔵サンスクリット写本 [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: No. 119]
 S6: 同上 [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: No. 120]
 S7: ネパール国立考古局内文書局所蔵サンスクリット写本 [*Nepālārājakiya-Virapustakālayastha-pustakānām Br̥natsūcīpatram* Vol. 39: No. 3-387]
- (3) チベット訳テキスト
 D: デルゲ版西藏大蔵経: *The Nyingma Edition of the sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gyur sponsored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center* Vol. 61. Oakland: Dharma Publishing.
 P: 北京版西藏大蔵経: *Tibetan Tripiṭaka, the Peking Edition*, Suzuki Foundation.
 T1, T2, T3 は凡例参照。
- (4) 校訂中の語句に関するもの
 om.: omit(s)
 ins.: insert(s)

凡 例

1. サンスクリットテキストは B(pp. 47-48, 51-54) を底本とし、次のサンスクリット写本を参照して校訂した。No. 17 から No. 25 までの番号は B において付けられた成就法、陀羅尼の番号である。

	No. 17	No. 20	No. 21	Nos. 22, 23	No. 25
S1	18b4-19b1	20a2-20a6	20a6-20b3	20b3-21a4	24b1-25a3
S2	13b3-14a5	14a9-14b3	14b3-14b5	14b5-15a1	17a7-17b7
S3	18b3-19b1	20a2-20a6	20a6-20b3	20b3-21a4	24b1-25a3
S4	12a11-13a1	13a10-13b3	13b3-13b6	13b6-14a3	16a8-16b7
S5	33a4-34b5	35b4-36a5	36a5-36b4	36b4-37b2	43a6-44b3
S6	—	—	—	166a9-167a6	—
S7	31b6-33a1	33a6-33b5	33b5-34a2	34a2-34b4	34b4-35b1

2. チベット語のテキストは次のデルゲ版を底本とし、北京版を参照して校訂した。
 西藏大蔵経中には、B に対応する訳が、三つのグループに分かれて収められていることが

吉崎 [1979: 15-31], 酒井 [1950: 117] によって紹介されている。各グループに対応するデルゲ版と北京版のナンバーは次の通りである。

T1 D: Nos. 3143-3304, P: Nos. 3964-4126

T2 D: Nos. 3306-3399, P: Nos. 4127-4220

T3 D: Nos. 3400-3644, P: Nos. 4221-4466

Bにおける各々の成就法、儀軌、陀羅尼に対応するデルゲ版、北京版の箇所は、吉崎 [1979: 29], 奥山 [1989: 391-393] によって比定されている。それによれば、ここで使用した成就法、陀羅尼の該当箇所は次の通りである。

	D		P	
No. 17	T3: No. 3414	/	T3: No. 4235	/
No. 20	T1: No. 3155	T3: No. 3418	T1: No. 3976	T3: No. 4238
No. 21	T1: No. 3156		T1: No. 3977	
Nos. 22, 23	T1: No. 3157 T2: No. 3329 T3: No. 3418	/	T1: No. 3978 T2: No. 4150 T3: No. 4239	/
No. 25	T3: No. 3419		T3: No. 4240	

3. テキストと翻訳につけた番号は筆者が成就法、及び陀羅尼の階梯を整理するために付けたものである。但し、これらの細分を示す番号は各成就法間の対応関係を示さない。例えば、No. 17の成就法の(2.1.3)は、No. 20の成就法の(2.1.3)と対応しない。
4. [] は筆者が補ったものである。
5. () は筆者が言い替えたものである。
6. 必要に応じて小見出しを〈 〉の中に記した。

4 和訳と訳注

No. 17

獅子吼¹ [観自在]に礼拝します。

(1.1) 〈帰命文〉

一面二臂で[身体は]白く、三眼で、獅子の乗り物に坐し、一切の病を取り除く、獅子吼尊を私は賞賛します。

(1.2) 〈観想の準備〉

まず最初に、行者は、口すすぎ²などをなし、心地よい場所³で、安楽な坐り方⁴で坐して、

(2.1.1) 白いア⁵の字より変わった月輪⁶を[観想し]、その上にある、白いフリー

ヒ⁷の字を[自らの]心臓のところで観想すべきである。[そして,]その(フリーヒの字の)光によって三界を照らし, 色究竟天⁸に住する獅子吼[観自在]と一切の師と仏と菩薩を引き寄せ, 現前の空中にとどめて,

- (2.1.2) 次に, 供養と懺悔など⁹をなし, 四梵住¹⁰を修習した後, 「¹¹-オーム¹², 一切法は空性という智金剛の自性をもつものである。オーム, 私は空性という智金剛の自性を本質とするものである⁻¹¹」と, この真言によって空性を加持¹³すべきである。
- (2.1.3) 次に, 誓願を憶念して, 白いパムの字より変わった¹⁴-蓮華を[観想し], その上に, 白いア¹⁵の字より変わった⁻¹⁴月輪を[観想し], その上に白いアーハ¹⁶の字より変わった白い獅子を, その上に, 白いアム¹⁷の字より変わった白い蓮華を[観想し], そのうてなに広がりつつある光の集まりをもつ白いフリーヒ¹⁸の字を[観想した後],
- (2.2.1) 〈本尊と行者が一体化する観想〉
その一切を変えて, 獅子吼[観自在]の姿をもつもの¹⁹を自分自身であるとするべきである。
- (2.2.2) 全身が白く, 一面二臂で, 三眼をもち, 髮髻冠²⁰をつけ, 頭に阿弥陀[の化仏]²¹をつけ, 獅子座²²において, 輪王坐²³で坐し, 虎皮の衣をまとい, 五つの如来²⁴が[まわりに]広がり, 肩に揺れ動く五つの紐²⁵をつけ, 半月によって飾られている[獅子吼観自在]と
- (2.2.3) [その]左手にある白い蓮華の上に白い剣を, その近くにある白い蓮華の上に様々なよい香りのする花で満ちた白い頭蓋骨を[観想し],
- (2.2.4) [本尊の]右側には, 白い蓮華の上に, 白い蛇の巻き付いた白い三戟²⁶を[観想すべきである]。
- (2.2.5) このような本尊²⁷を瞑想した後, 瞑想により疲れた行者は, 真言を唱えるべきである。この場合にはこれが真言²⁸である。「オーム, アーハ²⁹, シンハナーダ, フーム³⁰, パト, スヴァーハー」
- (3.1) ³¹-このとき, 規定された行為 [は次のごとくである]。像の形に作られた, あるいは布に描かれた⁻³¹本尊の前で, ³²-曼陀羅ごとに, ⁻³²一回の陀羅尼³³を[唱えるべきである]。
- (3.2) 〈陀羅尼〉
その陀羅尼は次のごとく続く。「三法に帰依します。大層慈悲深き聖観自在に, 菩薩に, 摩訶薩³⁴に帰命します」。そ[の陀羅尼]は次のごとく続く。

35-「オーム、アカター、ヴィカター³⁶、ニカター³⁷、カタムカター³⁸、カロタヴィールイエー³⁹、スヴァーハー」³⁵

(3.3) 地面に⁴⁰落ちていない牛糞⁴¹に真言を唱え、[その牛糞で]八つの曼陀羅を作るべきである。

(3.4) 曼陀羅ごとに、十三回陀羅尼を唱え、各々の曼陀羅に塗られても残った牛糞に七回真言を唱え、そ[の残りの牛糞]を病[人]に塗るべきである。

(3.5) <観想の功德>

第七日、第十三日、第二十一日に、造作五無間罪⁴²をなすものたちですら成就する。もし、成就しないなら私は造作五無間罪をなすものとなるう。

獅子吼[観自在]成就法は終わる。

<奥付け>

それをなして後、私が富と繁栄を得たところの、その獅子吼尊の成就法により、人々は⁴³健康になるだろう。これは学者であるアヴァドゥータ・シュリーアドヴァヤヴァジュラ様⁴⁴の作である。

訳 注

1 p. 518 注22参照。

2 サンスクリットは mukhaśucana である。mukha には「顔」あるいは「口」の二つの意味がある。Böhrtlingk [1868: 807] は mukhamśodhana が「口をすすぐこと」を指すと述べており、本文の場合も、これと同様に mukha は「口」を指すと考えられる。

3 この他、B (pp. 1, 28, 38, 54, 254, 419) においては観想をなすべき場所として、庭園の小屋 (ārāmalayana), 祠堂 (devagrha), 人気のない庵 (vijanālaya), 人気のない山の洞窟 (vijanagiriguhā), ガナ (悪鬼) の[いる]墓場 (ghanaśmaśāna), 祭式のために平たくされた地面 (catvara), 精舎 (vihāra) 等がある。なお、B における観想の場所について詳しくは清水 [1976: 60-62] を参照。

4 āsana には、「坐り方」あるいは「座」の二つの意味がある。T3 はこれを「座」という意味に解しているが、ここでは次のような理由から「坐り方」と解した。Nos. 22, 23 の成就法には mṛduviṣṭare upaviśya sukhāsanasthaḥ (柔らかい座に坐り、安楽な坐り方で坐し) と述べられており、viṣṭara は「座」を、āsana は「坐り方」を指すものとして使い分けている。Bhattacharyya [1968: 433] は、sukhāsana をどんな安楽な坐り方をも指すとしている。

5 S2, S3, S5, S7: am, S4: om。

6 成就法では、行者は最初に観想の対象を生み出す「場」として、自らの心臓に月輪、あるいは日輪 (太陽の輪) を観想する。

7 S1, S3-S5: hri。

8 三界 (欲界、色界、無色界) の内、色界には、十七の天がある。色界は禪定に応じて四

つの段階に分けられる。そのうち、第四の禪定には下から順に、無雲天、福生天、広果天、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天という八つの天が存在し、色究竟天が色界の最上に位置する（『冠導阿毘達磨俱舍論』Vol. 18, 2a）。これに関する *Abhidharmakośabhāṣya* (p. 111, 24-27) の原文は以下の通りである。 *caturtham anabhrakāḥ puṇyaprasavāḥ bṛhatphalāḥ abṛhā atapāḥ sudṛṣāḥ sudarśanā akaṇiṣṭhā ity etāni saptadaśasthānāni rūpadhātuḥ*。

- 9 七種無上供養 (*saptavidhānuttarapūjā*) を示すものと考えられる。ここでは、供養と懺悔などの具体的な内容は示されていないが、No. 24 の空行世自在成就法 (B, p. 55) では、花、香水、燈明などで師と仏陀と菩薩を供養し、懺悔を表す偈文を唱えることが述べられている。清水 [1976: 65-69] によると、B では七種無上供養の内容、順番は、一定していないが、多くのは懺悔 (*pāpadeśanā*) から数えるものと礼拝 (*vandanā*) から数えるものとの二種に大別される。このように供養と懺悔など (*pūjāpāpadeśanādi*) と示される例はこの他、B (pp. 53, 417) にある。また、B (p. 466) では供養をはじめとして、懺悔、隨喜 (*puṇyānumodanā*)、廻向 (*puṇyapariṇāmanā*)、三歸依 (*triśaraṇagamana*) が示されている。
- 10 No. 24 の空行世自在成就法では、慈悲喜捨を表す偈文を唱えることが述べられている (B, p. 57)。四梵住は、有情が楽を得ることに心に向けて三昧に入ること (慈)、有情が苦を離れることに心に向けて三昧に入ること (悲)、有情が楽を得、苦を離れることに心に向けて三昧に入ること (喜)、有情が平等であり、親しみや怨みがないことに心に向けて三昧に入ること (捨) である（『冠導阿毘達磨俱舍論』vol. 29, 1b-2a）。これに関する *Abhidharmakośabhāṣya* (p. 453, 3-5) の原文は以下の通りである。 *sukhitā vata sattvā iti manasi kurvan mairīṃ samāpadyate. duḥkhitā vata sattvā iti karuṇāṃ modantāṃ vata sattvā iti muditāṃ sattvā ity eva manasi kurvann upekāṃ samāpadyate*。
- 11 これと同様の真言は *Guhyasamājatantra* (p. 11) にもみとめられる。それについて立川 [1987c: 12] は、この真言に含まれる「自性」 (*svabhāva*) という語が肯定的な意味で用いられていると指摘している。この「自性」は、行者が懺悔等を行い、四梵住を修習することによって自己を浄化した後にも残る、否定されない「核」のようなものを意味すると考えられる。そして、真言の言葉に従えば、金剛のごとき知恵の自性をもつものは、空性 (最高の真理) であり、私 (行者自身) であると解釈される。
- 12 B: 「オーム」省略。
- 13 渡辺 [1982: 548-549] は、いわゆる原始仏典と大乘經典のみの資料から「加持」 (サンスクリット: 動詞 *adhiṣṭhā*; 名詞 *adhiṣṭhāna*; 動詞過去受動分詞 *adhiṣṭhita*) を定義しているが、その一部を引用すると次のごとくである。「動詞本来の意味は“強力に立つ”であるが、原始仏教經典以来多くの經典の使用例からみれば仏または菩薩が衆情を守護し教化し指導する目的で、慈悲心から超自然的な現象を生ぜしめることであり、神々や人々も時にはその能力をもつことができる」。また Skorupski [1983: 109] は、加持 (*adhiṣṭhāna*) が「力を与えること」、「祝福すること」、「聖化すること」を意味すると述べている。そして、仏陀や様々なタントラの神々、あるいは、完成したヨーガ行者は他人に伝えることのできる固有の力を持ち、これらの力が他人に伝えられたとき、他人にある行為をさせたり、その内的な性質を変えさせることができると説明している。以上の諸説を参考にして、本文における「加持」の意味を考えると次のごとくである。即ち、ここでは行者は真言を唱

- えることによって自らを加持すると考えられる。行者には空性という最高の真理が威力をもつものとして捉えられており、その力によって行者は自らを浄化させるものと理解される。
- 14 S1, S3-S5, S7: 省略。
- 15 S2: am。
- 16 S1, S5: ā。
- 17 S5 a。
- 18 S1: hri。これは種子 (bija) と言われるもので、SM の成就法では行者はこれを尊格に変化させる。この hrih と言う種子は獅子吼観自在の成就法だけでなく他の観自在の成就法 (B, pp. 29, 31, 33, 36, 46, 65), クルクラー成就法 (B, pp. 358, 365, 375, 382, 384) に数多くみられる。また、SM の金剛座尊成就法 (B, p. 18), 般若波羅密成就法 (B, p. 322) に述べられる阿弥陀の種子でもある。
- 19 T3 は「もつもの」を省略。
- 20 頭髪を、冠のように高く結い上げた髪型 [逸見 1935: 339]。
- 21 この他、阿弥陀を化仏とする観自在菩薩は B (pp. 40, 43, 46, 47, 51, 53) に数多く述べられている。一方、阿弥陀以外の化仏をもつ観自在菩薩がある。例えば、金剛法 Vajradharma 尊 (B, p. 33) は五仏を化仏とし、世間主 Lokanātha 尊 (B, p. 49) は金剛法尊を化仏とする。なお、獅子吼世自在の彫像例において阿弥陀を化仏とせず、塔 (stūpa) をつける例がある [BANERJI 1933: pl. 34c]。
- 22 Liebert [1976: 271] は、獅子座 (siṃhāsana) が、四本の獅子の足をともなった座、あるいは、獅子によって支えられた蓮華の座であると述べている。また、Gupte [1980: 20] は、獅子座は四本足をもち、長方形、または円形をし、四本の足が小さな獅子でできていると説明している。本文中 (2.1.3) に述べられているように、ここで述べられた獅子座とは蓮華上の月輪にある白い蓮華を背負った獅子を指していると考えられる。獅子吼観自在の獅子座を Foucher [1905: 31], Poussin [1909-1953: 260], Mallmann [1948: 190], Getty [1962: 60] は、剣などと並んで、文殊より取り入れた特徴であると説明している。また、Zimmer [1984: 181] は、獅子座を、「観自在の女性的特性の優位と一致した女神である、ドルガーの乗り物 (獅子) より与えられたもの」と述べている。
- 23 転輪聖王の坐法で、輪跏、または輪王跏とも言われる。左足を深く内方に屈し、左膝を直立させるものであると、逸見 [1935: 166-167] に述べられている。また、『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成仏儀軌』(不空訳 大正蔵 No. 957, Vol. 19, p. 326b-c) には、「或作輪王坐，交脚或垂一，及至獨膝堅，輪王三種」と述べられている。即ち、足を交差するものと、一方の足を垂らすものと、一方の膝を立てるものの三種の輪王坐が説かれている。
- 24 Foucher [1905: 34] は「五つの仏が、そ[の獅子吼観自在]の身体より広がりつつ」と訳し、さらに脚注において、造像例 [FOUCHER 1905: fig. 2] における背板上部の縁にみられる五つの仏であると述べている。
- 25 T3: rol pa'i dpa' bo lha dañ zla ba phyed pas brgyan pa (変化した五英雄と半月に飾られた)。このように T3 は、-pañcacira を、-pañcavira (五英雄) と解釈している。また、Mallmann [1948: 189] は、amsalulitapañcaciram を「肩にはためく五つの細い紐」と解釈している。Mallmann [1948: 190] は、これを乗り物である獅子と同様、文殊より

取り入れたものであると述べている。

- 26 三戟とは、元来、シヴァ神の持ち物であり、三股の戟を指す。この他、本尊の特徴である、三眼、虎皮の衣、頭蓋骨、半月なども同様であり、この尊が、シヴァ神より強い影響を受けていることを示している [MALLMANN 1948: 187]。なお、シヴァ神の戟、三眼、虎皮、頭蓋骨はシヴァ神の特徴として *Mahābhārata* (xiii, 14, 119; xiii, 127, 18, 40; xiii, 128, 14) に記述されている。
- 27 以上のごとく、獅子の上に坐し一面二臂で蛇の巻き付いた三戟をともなうなどの特徴をもつ獅子吼観自在の作例は、次の図版に紹介されている。インドの作例：[WADDELL 1894: pl. 1; FOUCHER 1905: fig. 2; BANERJI 1933: pl. 34c; MALLMANN 1948: pl. 13; BHATTACHARYYA 1968: fig. 99, 101; 町田 1968: pl. 86; HUNTINGTON 1984: pl. 155; ZIMMER 1984: pl. 321; MUKHOPADHYAY 1985: fig. 5, 6; NATH 1986: pl. VB]。ネパールの作例：[アモーガヴァジュラ 1982: 7; 立川 1986: 74]。ラマ教（中国・チベット）の作例：[CLARK 1965: pl. A, 6A34, B, 161; GRÜNWEDEL 1970: ABB. 104; 逸見 1975: pl. 551; LOKESH CHANDRA 1986: pl. 640, 2297; 頼富 1982: 202]。
- 28 本文の文脈における真言（マントラ）の意味を考える前に、マントラについて略説しておく。Bharati [1965: 103] は、「真言」のサンスクリット：mantra が、「考える」という動詞の語根 $\sqrt{\text{man}}$ と、手段、道具を示す接尾語 -tra (Pāṇini: 3, 2, 181) とが接合してできたものであると述べている。歴史的にはマントラは古くはヴェーダの時代より存在していた。マントラは、ある種の威力をもち、ブラフマン（祭司）はマントラを用いることによって神々を支配し、また、神を呼び出すことができたことと Crooke [1910-1953: 441] は述べている。ヴェーダの伝統では、四種のマントラがあるとされている (*Kātyāyana śrautasūtra*. I, 3, 1)。それらは Bühler [1901: 97], Staal [1989: 48] の解説によれば、リグ・ヴェーダの韻文 (rc), ヤジュル・ヴェーダの呪く文句 (yajus), サーマ・ヴェーダの歌詠 (sāman), ヤジュル・ヴェーダの一種に属し、大きな声で唱える文句 (nigada) である。一方、仏教において、マントラは仏教徒が用いるべきものではないとして仏陀によって最初は否定されていたが、後に、毒や腹痛などを治癒するためのマントラは、許されたようであると梅尾 [1927: 438-440] は述べている。マントラは、バラモン教だけでなく仏教においてもヒンドゥー教においても重要な機能をもつようになるが、エリアーデ [1981: 24] は、マントラの機能の重要性について次のように述べている。「それ（マントラの実際的価値と哲学上の重要性）は第一に、精神集中のための補助として用いられた諸音素のヨーガ的機能であり、第二に神秘音に関する古代の諸伝統の再評価を通じての、靈智主義的システムと内化された典礼との精密化である」。エリアーデの指摘した第一の点は仏教における「陀羅尼」（訳注33参照）の機能の一つともつながるものである。また、ヒンドゥー教のマントラの一つでもある、何百万回と繰り返されるジャパ (japa) の中に、高島 [1989: 52-53] は、このヨーガ的機能をもとめている。第二の点はエリアーデ [1981: 26-27] が述べるように、マントラのもつ「神秘的な力」と関係し、それによって行者は仏の境地を得たり、深い罪さえも免れるのである。このような効果はバラモン教に属するグリフヤ・ストラ（家庭経、*Grhyasūtra*）等にも述べられていると Gonda [1980: 214-215] は指摘している。そこでは、悪運、罪、害悪を遠ざけるなどの働きをもつマントラが述べられている。さらに、このようなマントラの側面は仏教の陀羅尼や明呪 (vidyā) にもみとめられる。このマントラのもつ威力は、マントラがその指し示している「事物」であるという事実

負うているとエリアーデ [1981: 27-28] は述べている。例えば、「般若波羅密多マントラが唱えられることによって、『女神』の姿をとった『宇宙的空の真理』とマントラとの直接的、全体的な同化が存在する」のである。しかし、このようなマントラの「力」を得るためには、Bharati [1965: 106], エリアーデ [1981: 26] が指摘するように、師から弟子へとマントラが伝えられなければならないのである。なお、マントラには、形態的に om 等の短いマントラや一つの文章からなるマントラ等がみとめられる。以上の諸説を参考にして、本文におけるマントラの機能を考えるならば、それには、どちらかといえば、マントラのヨーガ的機能がみとめられる。但し、本文中のマントラは、観想を終わらせるためのものであり、むしろ精神集中を解くためのものであると考えられる。

29 T3 は「フリーヒ」を挿入する。

30 B: huṃ。

31 T3: cko ga 'dis sku gzugs byas te yañ na ras bris byas la (この儀軌によって、[本尊の]像を作り、または布に描き)。

32 T3: so so'i maṇḍala byas la (各々の曼陀羅をつくり)。

33 Waddell [1912: 158] によれば「陀羅尼」(dhāraṇī) は、字義通りには、サンスクリット語の語根 √dhr̥ (保持する) より派生し、「保持するもの」あるいは「(呪力の) 容器」を意味すると述べている。Waddell [1912: 156] は、「陀羅尼」を定義して「定形句の仏教の呪文であり、アニミズムの起源をもつ通俗的な発明である。それは長い間慣れてきた外的な手段によって、外界における表面的な恐れや危険から迷信深い人間を守るために仏教徒が改作したものである」と述べ、災難から人間を守護するという、除災の機能を陀羅尼の中にみとめている。頼富 [1989b: 316-317] は、「仏教において『陀羅尼』が明確な体系をもって登場したのは大乘仏教である」と述べ、その中で中心的位置をしめる経典が『般若経』(一群の経典の総称) であると述べている。その中でも特に『大品般若経』のグループには「陀羅尼」が、経文等を受持し、記憶する能力を指す用例がみとめられると述べている。そして、頼富 [1989b: 331-334] は、このような陀羅尼の他にも、神秘的な威力をもつ陀羅尼が形成され、後世、初期密教などでは、除災招福等の現世利益を目的とする神呪(マントラ、真言)と同化した陀羅尼が成立したと述べている。以上の意見を参照すれば、陀羅尼は、少なくとも、経文を記憶する能力を指す場合と、除災、招福の機能をもつ場合とがあると考えられる。この成就法では、牛糞を用いて曼陀羅を作った後、残った牛糞に陀羅尼が唱えられる。そして、陀羅尼が唱えられた牛糞を病人に塗ることによって、病気が治ると述べられている。この場合の陀羅尼には、現世利益を目的とした除災の機能があると理解される。

34 S4 は「摩訶薩」を省略。

35 同様の真言は *Guhyasamājatantra* (p. 60) にもみられる。

36 「ヴィカターよ」。vikāte は vikāṭa の女性形の呼格 (vocative) と考えられる。vikāṭa は Edgerton [1970: 479] によればヤクシャ (神靈) の名称である。

37 S1: trikaṭe S2, S3, S4: trikaṭe を加える。S5: 省略。

38 「カタンカターよ」。kaṭaṃkaṭa は Edgerton [1970: 164] によればヤクシャの名称である。S1: kaṭakaṃṭe。

39 「頭蓋骨の英雄よ」。この語は karotavīrya (頭蓋骨の英雄) の女性形の呼格と考えられる。また、この語は、マハーバーラタに、シヴァ神の千の名前の一つとして記されている

(*Mahābhārata*, XII, Appendix 1, No. 28, 209)。S2, S3: *karotavīryya*, S4: *rotavīryya*。

40 B, S1-S5, S7 は「地面に」を省略。

41 牛の肛門より直接採取された牛糞を示す。

42 次の五つの罪である。母を殺害すること(害母)。父を殺害すること(害父)。阿羅漢を殺害すること(害阿羅漢)。僧伽の団結を破ること(破和合僧)。悪心をもって仏身の血を出すこと(悪心出仏心血) (『冠導阿毘達磨俱舍論』 Vol. 17, 15a)。これに関する *Abhidharma-kośabhāṣya* (p. 259, 8-9) の原文は以下の通りである。 *pañcānantaryāṇi karmāvaraṇam. tadyathā māṭṛvadhāḥ piṭṛavdho arhadvadhāḥ samghabhedaḥ tathāgataśarire duṣṭacittarudhīrotpādanam. Mahāvīyūṭpatti* [ISHIHAMA and FUKUTA 1989: 122-123] にも同じ内容の五無間罪が述べられている。原文は以下の通りである。 No. 2334 *māṭṛghātaḥ* (Tib. ma bsad pa), No. 2335 *arhadvadhāḥ* (Tib. dgra bcom pa bsad pa), No. 2336 *piṭṛghātaḥ* (Tib. pha bsad pa), No. 2337 *samghabhedaḥ* (Tib. dge 'dun gyi dbyen byas pa), No. 2338 *tathāgatasyāntike duṣṭacittarudhīrotpādanam* (Tib. de bzin gśeḡs pa la nan sems kyis khrag phyuñ ba)。

43 T3: *mgon po señ ge sgra dañ ni 'gro ba rnam ni* (獅子吼[尊]と人々は)。

44 B の序文 (p. XCI) に *Advayavajra* は、一般に *Avadhūtipā* として知られ、この成就法の他 B の No. 217 (*Vajravārāhi-sādhana*) と No. 251 (*Saptākṣara-sādhana*) の二つの成就法の著者であると述べられている。

No. 20

獅子吼⁴⁵[観自在]に帰命します。

(1) <観想の準備>

最初に口すすぎなどをなし、安楽な坐り方で⁴⁶坐して、

(2. 1. 1) 行者は自らの心臓の日輪に、アーハ⁴⁷の字を見て、眼前に師と仏陀等を導いて来て、懺悔などをなすべきである。

(2. 1. 2) 次に、空性を了解し、加持し、誓願を憶念すべきである。

(2. 1. 3) 次に、ア⁴⁸の字より変わった⁴⁹フームの字を[観想し]、それ(フームの字)より変わった月[輪]を[観想し]-⁴⁹、その上に、オームの字より変わった赤い蓮華を[観想すべきであり]、

(2. 1. 4) その上に、⁵⁰アーハ⁵¹の字より変わった⁻⁵⁰白い獅子を、その上の月[輪]に、フリーヒの字より生じた獅子吼尊を[観想すべきであり]、

(2. 1. 5) [獅子吼観自在は、身体が]白く、髮髻冠をいただき、三眼をもち、二臂で、苦行者の衣をまとい、輪王坐で坐す。

(2. 1. 6) ⁵²左手より延びた⁻⁵²蓮華の上に、燃えさかる上向きの剣を[観想すべきであり]、右側に⁵³白い蛇の巻き付いた白い三戟を、⁻⁵³左側に様々なよい

- 香りのする花によって満たされた白い頭蓋骨を[観想すべきであり]、
- (2.1.7) 阿弥陀[の化仏]⁵⁴をいただき、五つの如来が[回りに]広がっており、偉大な変化身⁵⁵をもつ[獅子吼観自在]を瞑想すべきである。
- (2.1.8) 唱える真言は、「オーム、アーハ、フリーヒ、シンハナーダ、フォーム⁵⁶、パト」である。
- ⁵⁷-以上が獅子吼世自在成就法である。^{-57 58}

訳 注

- 45 p. 518 注22参照。
- 46 T1: bde ba'i stan la, T3 stan bde ba la (安楽な座に)。訳注4参照。
- 47 S1, S3, S4: ā。
- 48 S2: āh, S1, S3, S4, S5: ā, S7: am。
- 49 B, S7: 省略。
- 50 S1: 省略。
- 51 S3, S4: ā。
- 52 T1: phyag g'yon pa na gnas pa'i (左手にある…)
- 53 T3: rtse gsum dkar po bsnams pa (白い三戟を観想する)。
- 54 T1: dbu rgyan la mi bskod pa bzugs (宝冠に阿闍がおり…)
- 55 「変化身」(nirmānakāya) は、法そのものの体現である「法身」(dharmakāya) を基盤として衆生を教化するために現れた、肉体をもつ現実的な姿をとった仏の身体である。
- 56 B, S2: hum。
- 57 T3: 省略。
- 58 T1 には dge sloṅ tshul khriṃs rgyal mtshan gyis bsgyur ro (比丘ツルティム・ゲルツェンが訳した) という奥付けがある。

No. 21

三法に帰命します。

- (1) <陀羅尼>
- 大層慈悲深き聖観自在に、⁵⁹-菩薩に、摩訶薩に帰命します。そ[の陀羅尼]は次のごとく続く。「オーム、アカター、ヴィカター⁶⁰、ニカター、カタムカター⁶¹、カローター⁶²、カロタヴィールヤ⁶³、スヴァーハー」
- (2.1.) これらの陀羅尼を、尊とき聖観自在の⁻⁵⁹前で⁶⁴-夜明けごとに⁻⁶⁴、地面に落ちていない牛糞⁶⁵を用いて八つの曼陀羅を作り、曼陀羅ごとに十三回唱えるべきである。
- (2.2) 次に、七回、牛糞の残りに真言を唱え、病人に塗るべきである。

(3) <功德>

一切の病を鎮める。⁶⁶第七日、第十三日、第二十一日に、造作五無間罪をなしたものたちさえもが成就しないなら、私は⁻⁶⁶造作五無間罪をなすものとなろう⁶⁷。

獅子吼[観自在]の陀羅尼は終わる⁶⁸。

訳 注

59 S4: 省略。

60 「ヴィカターよ」。訳注36参照。

61 「カタンカターよ」。訳注38参照。S1: *kaṭakamte*。

62 「頭蓋骨よ」。S5 *karotake*。

63 「頭蓋骨の英雄よ」。訳注39参照。S3, S7: *karotaviryē*, S5: *rotaviryā*。

64 T1: *nañ bar* (夜明けに), T3: 省略。

65 T1: *sña mor ba'i lci ba* (朝の牛糞)。

66 T2: *gal te ni ma bdun nam bcu gsum mam ni su rtsa gcig tu byas nas mtshams med pa lña byas pas kyañ 'grub par 'gyur ro/gal te ma grub na de'i* (もし、七日、十二日、二十一日に行うなら、造作五無間罪をなしたものたちも、成就するだろう。もし、成就しないなら、この…)。

67 T1: *nas sañs rgyas bcom ldan 'das rnams bslus par yañ 'gyur ro* (私は、諸仏、諸菩薩をだますものとなろう)。

68 T1 には *dge sloñ tshul khriṃs rgyal mtshan gyis bsgyur ba'o* (比丘ツルティム・ゲルツェンが訳した) という奥付けが加わる。

Nos. 22, 23

⁶⁹獅子吼⁷⁰[観自在]尊に帰命します。⁻⁶⁹

(1) <観想の準備>

まず最初に、行者は口すすぎなどをなして、⁷¹柔らかな座に坐り、安楽な坐り方で坐し、⁻⁷¹

(2.1.1) 自らの心臓の月輪に、白いフリーヒの字を見て、現前に、そ[のフリーヒの]光によって引き寄せられた、師と仏陀と菩薩を観想すべきである。

(2.1.2) その後、供養と懺悔などをなし、空性を修習して後、⁷²「オーム、私は空性という智金剛の自性を本質とするものである⁻⁷²」と、こ[の真言]によって、加持すべきである。

(2.1.3) 次に、すぐさまパムの字より変わった、赤い蓮華⁷³を、その上に、シムの字より変わった、白い獅子を[観想すべきである]。

(2. 2. 1) 〈本尊と行者が一体化する観想〉

その上に⁷⁴、フリーヒの字より生じた獅子吼世自在の姿をもつもの⁷⁵を自分自身であると瞑想すべきである。

(2. 2. 2) [獅子吼尊は身体が]白く、⁷⁶阿弥陀[の化仏]と髪髻冠をいただき、⁻⁷⁶三眼をもち、二臂で、苦行者の衣を付け、輪王坐で坐している。

(2. 2. 3) 左手より延びた蓮華の上に、炎の上がる剣と、右に白い蛇の巻きついた白い三戟と、左によい香りのする花によって満たされた白い頭蓋骨[があり]、五つの如来が[回りに]広がっており⁷⁷、⁷⁸偉大な変化の姿をもつものを瞑想すべきである。⁻⁷⁸

(2. 2. 4) 唱える真言は、「オーム、アーハ、フリーヒ、シンハナーダ、フーム⁷⁹、パト」である。⁸⁰

(3. 1) 〈陀羅尼〉

⁸¹すぐに陀羅尼が用いられる。⁻⁸¹「三法に帰依します。大層慈悲深き、聖観自在に、菩薩に、摩訶薩に⁸²、帰命します」。そ[の陀羅尼]は次のごとく続く。

「オーム、アカター、ヴィカター、ニカター⁸³、カタムカター、カローター⁻⁸⁴、カロータヴィールィエー⁸⁵、スヴァーハー」

(3. 2) ⁸⁶真言の供養である。⁻⁸⁶仏の前で、夜明けに、地面に⁸⁷落ちていない牛糞によって、八つの曼陀羅を作り、曼陀羅ごとに、十三回[真言を]唱えるべきである。

(3. 3) 牛糞の残りに七回⁸⁸真言を唱え、病[人]に塗るべきである。

(3. 4) 〈功德〉

一切の病を鎮めるだろう。もし、第七日、第十三日⁸⁹、第二十一日に、造作五無間罪をなすものたちにとってすら、これが成就しないなら、私こそは造作五無間罪をなすものとなろう。

⁹⁰獅子吼[観自在]成就法。^{-90 91}

訳 注

69 S1-S5: 省略, S6 「オーム, 獅子吼[尊]に帰命します」。

70 p. 518 注22参照。

71 S1-S5, S7: 省略, T1: bde ba'i stan la gnas te, T2: bde ba'i gdan la 'dug ste, T3: stan bde ba la 'dug ste (安楽な座に坐し)。

72 T1: om ston pa ñid kyi ye śes rdo rje'i ran bzin gyi bdag ñid ni na yin no (オーム,

- 空性の智金剛の自性の本質である)。
- 73 T1: padma dkar po'o (白い蓮華)。
- 74 T1 de'i rgyab tu zla ba la (その背中の月[輪]に)。
- 75 T1, T2, T3 は「もつもの」を省略。
- 76 T1: snañ ba mtha' yas dañ ral pa dañ dbu 'gyan can (阿弥陀と髮髻と冠をもち)。T2 rol pa'i thor tshugs can (髮髻をつけて)。
- 77 T2: sku las de bzhin gśegs pa lña 'phro ba'i gzugs su bsgoms la (身体より、五つの如来が広がった姿のものとして観想して)。
- 78 T1: mña nan las 'das pa chen po'i skur bsgom par bya ba'o (偉大なる涅槃の身体として観想すべきである)、T2: 省略、T3: sprul pa chen po'i skur bsgom par byao' (偉大な変化の姿として観想すべきである)。
- 79 B, S4: huṃ。
- 80 以上の成就法は B では(獅子吼成就法は終わる)という奥付けが続き、以下の陀羅尼文 [B では、No. 23 の陀羅尼]と分かたれている。京大写本 (S6) には、「以上がサーダナ集成の獅子吼世自在成就法139節」という奥付けがあり、No. 23 の陀羅尼と分かたれている。東大写本四種 (S1-S4)、京大写本 (S5)、ネパール考古局所蔵の写本 (S7)、蔵訳 (T1, T2) では、以上の成就法は、No. 23 の陀羅尼に直接つながり、その最後に、いずれも「獅子吼成就法」と記されている。また、バッタチャリヤの用いた七種の写本は No. 22 の成就法の最後に「獅子吼成就法は終わる」という奥付けがなく、直接 No. 23 の陀羅尼に続いている。
- 81 T2: sñon du bsñen pa 'bum phrag gcig bzlas pa bya'o (はじめに、礼拝者は十万[の真言]を唱えるべきである)。
- 82 S1 は「摩訶薩」省略。
- 83 S2: nikāṭa。
- 84 S4: karoṭi, S5: karokāṭe。
- 85 S2: karoṭavīryya, S5: roṭavīryye, S7: karovīrye。
- 86 T1: bya ba 'di'i rim pa ni (行為の順番は)、T2: 'di'i ñe bar spyod pa ni (この行為は)、T3: sñags 'di brjod nas (この真言を唱えて)。
- 87 B, S1-S7 は「地面に」を省略。
- 88 T2 は「七回」を省略。
- 89 T2: 「第十四日」。
- 90 B: 「獅子吼陀羅尼は終わる」、S6: 「以上が成就法集成の獅子吼世自在成就法 140節」、T2: señge sgra'i sgrub thabs slob dpon tsandra go mis mdzad pa rdzogs so (師チャンドラゴーミ[ン]がおつくりになった獅子吼成就法は終わる)、T3: 省略。
- 91 次の奥付けが加わる。T1: pañḍita ratna ka ra'i źal sña nas dge sñon tshul khrims rgyal mtshan gyis bsgur ro (師であるラトナーカラがおっしゃるとおりに、比丘ツルティムゲルツェンが訳した) T2: pañḍita don yod rdo rje dañ khams pa lo tsṭsha ba dge sñon ba ris gsyur pa'o (師であるトンヌードルジェーとカムのひとつである翻訳者ワリが訳した)。

No. 25

(1. 1) <帰命文>

⁹²私は、一切の病を取り除く獅子吼⁹³尊に帰命します。[人は]観想という方法のみによって、一切の罪障より解脱すべきである。

(1. 2) <観想の準備>

[行者は]まず最初に、口のすすぎなどをなして、清浄な衣をまとい、清らかな地面に安楽な坐り方で⁹⁴坐して後、

(2. 1. 1) 自らの心臓の月[輪]に、フリーヒ⁹⁵の字を観想し、そ[のフリーヒの字]の光によって一切の如来を引き寄せ、供養して懺悔等をなすべきである。

(2. 1. 2) 次に、慈悲喜捨⁹⁶を修習し、自性の清浄なる[次の]真言を、先に唱えてから空性を観想すべきである。「オーム、一切法は自性が清浄であり、私は自性が清浄である。オーム、私は空性という智金剛の自性を本質とするものである」

(2. 1. 3) その後、⁹⁷自らの身体を幻にすぎないものとみて、⁻⁹⁷赤いうの字より変わった赤い八つの花卉をもつ蓮華の上に、フリーヒの字から変わった白い獅子を[観想すべきである]。

(2. 2. 1) <本尊と行者が一体化する観想>

⁹⁸そ[の白い獅子]の上の背中の月[輪]に、^{-98 99}光輝くフリーヒ¹⁰⁰の字を[観想し]、そ[のフリーヒの字の光]によって[如来たちを]引き寄せて、自らに一切の如来を入れて後⁻⁹⁹、自らを獅子吼観自在の姿をもつもの¹⁰¹であると観想すべきである。

(2. 2. 2) [身体は]白く、三眼で、髪髻冠をつけ、装飾物をつけず、虎皮の衣をまとい、獅子の座に坐り、輪王坐で[坐し]、月[輪]の座をもち[即ち、座に坐り]、月の光をもてる[獅子吼観自在]を観想すべきである。

(2. 2. 3) 右に¹⁰²、白蛇によって巻き付かれた白い三戟を[観想し]、左に、様々なよい香りのする花に満たされた蓮華の入れ物と、左手より延びた蓮華の上に、燃えさかる剣を[観想し]、¹⁰³自らの身体に、⁻¹⁰³五つの如来が広がっているのを見るべきである。

(2. 2. 4) 次に、心臓¹⁰⁴の種子によって、智薩埵¹⁰⁵を引き寄せ、[自らに]来入させ、如来を遍満させて、[自らを]灌頂すべきである。頭に阿弥陀の印[即ち、化仏]をもつものを自分自身であると思念すべきである。

(2. 2. 5) 次に、神の姿で真言をとなえるべきである。そこで、これが真言である。

「オーム、アーハ、フリーヒ¹⁰⁶、シンハナーダ、フォーム¹⁰⁷、パト、スヴァーハー」

- (3. 1) その後¹⁰⁸、良い香り等の曼陀羅をつくり、供養のために花などを捧げて、崇めるべきである。
- (3. 2) さらに、この真言を唱えるべきである。「オーム¹⁰⁹、三法に帰依します。大層慈悲深き聖観自在に、菩薩に、摩訶薩に帰命します」。その〔陀羅尼〕は次のごとく続く。「オーム、アカター、ヴィカター¹¹⁰、ニカター¹¹¹、カタンカター¹¹²、カロター¹¹³、カロータヴィールイエー¹¹⁴、スヴァーハー」
- (3. 3) この真言によって曼陀羅の土塊をつかみ、二十一回真言を唱え、病〔人〕に塗った後、〔その病人は〕健康になる。
- 以上、吉祥なる¹¹⁵獅子吼世自在の成就法は終わる¹¹⁶。

訳 注

- 92 T3 は「吉祥なる獅子吼〔尊〕に帰命します」が先につく。
- 93 p. 518 注22参照。
- 94 T3: 「安楽な座に」
- 95 S1: hri。
- 96 訳注10参照。
- 97 T3: raṅ gi lus sgra brñan pa daṅ 'dra bar bltas nas (自らの身体をこだまのごとくに見て)。
- 98 T3: de'i sten du (その上に)。
- 99 B: hrīḥkāraṃ saraśmikam tenaivakṣya sarvvatathāgatapraveśena (光輝くフリーヒの字を〔観想し〕、それによって引き寄せて、一切如来の来入によって) T3: hrīḥ yig pa'i 'od zer gyis de bziṅ gśegs pa rnam s gdan draṅ siṅ bdag ñid bcug nas (フリーヒの字の光によって如来たちを引き寄せ、自らに入れて)。
- 100 T3 は「もつもの」を省略する。
- 101 S7: hri。
- 102 T3: 「右手に」。
- 103 T3: 「自らの身体より」。
- 104 T3: 「自らの心臓の」。
- 105 「智薩埵(jñānasattva) は、従来の研究者によって「智的存在」[立川 1986: 89]、「智の存在」[清水 1979: 61]、「悟りへの勇気を有する生類」[立川 1978: 215] 等の意味をもつと考えられている。智薩埵は No. 24 の空行観自在成就法(B, p. 60) では、成就法において三摩耶薩埵(samayāsattva)と一体化する。トゥッチ [1984: 153]によれば、「三摩耶薩埵とは、精神集中の対象である本尊に理念的に委縮した行者が、一時的にその姿を取る『約束の存在』なのである」。三摩耶薩埵と智薩埵が合一することによって、本尊と行者との最終的な一体化が完成すると考えられる[肥塚 1967: 73]。本文中におい

ては、「三昧耶薩埵」という言葉はみられないが、行者は本尊の姿と一体化した後に、智薩埵と合一すると述べられており、三昧耶薩埵が想定されていないのではなく、「三昧耶薩埵」という言葉が省略されているにすぎないと考えられる。清水 [1979: 63-64] は三昧耶薩埵と智薩埵をラサ(情趣)論と結び付け、前者が恒常的情態、後者が情趣に対応すると述べている。また、高田 [1978: 506-507] は、チベット仏教資料に基づき、「三昧耶薩埵とは行者が自ら呼び起こした、あるいは、心に描いた本尊に合致した身をいい、智薩埵とは因位の人間的な菩薩(十地の菩薩)または果位の仏菩薩(金剛薩埵等)を指す」と定義している。

- 106 S1, S3: hrī.
- 107 B, S3: huṃ.
- 108 T3 は「供養の後」を挿入する。
- 109 S2-S5, S7: 省略。
- 110 「ヴィカターよ」, 訳注36参照。
- 111 S1, S3, S5 は kaṭe を, S2, S4 は trikaṭe を挿入する。
- 112 「カタンカターよ」, 訳注38参照。
- 113 「頭蓋骨よ」, S5: karokaṭe.
- 114 S1: karoṭāvīrya.
- 115 B, S1, S3-S5, S7 は「吉祥なる」を省略する。
- 116 S7 は「は終わる」を省略する。

5 サンスクリットテキスト

テキスト校訂に際し、次の規則に従った。

1. 筆記の便宜上、語末の m に代用されるアヌスヴァーラについては読みに支障がない限り注記しなかった。
2. 筆記の便宜上、破裂音に属する鼻音に代用されるアヌスヴァーラについては注記しなかった。例えば, paṃca, maṃtra のごときものである。
3. 連声法の規則による語頭の a の消失を示すアヴァグラハが脱落する場合がある。それは, “-ātmako ham” のみであり、注記しなかった。
4. 同一子音の連続を避け、その有無については読みに支障がない限り注記しなかった。例えば, sarva と sarvva, satva と sattva, sidhi と siddhi のごときものである。
5. paśyēt を誤って paśyat と表記することがあるが、それらは表記しなかった。
6. 子音の直前にある r の脱落は読みに支障がない限り注記しなかった。例えば, kuryāt と kuyāt, sūrya と sūya, のごときものである。
7. b と v, ś と s, r と l, jra と ja, th と t の混同がみられるが、読みに支障がない限り注記しなかった。
8. …の表記は判読できない箇所を示す。
9. 種子 (bija) を示すために、本来は母音連続が生じる場合でもハイフンで分割した。例えば, śukla-akāra のごときものである。

No. 17

117-namaḥ siṃhanādāya-117

- (1.1) dvibhujāikamukhaṃ śuklaṃ trinetraṃ¹¹⁸ siṃhavāhanam^{119/120} siṃhanādāma¹²¹ ahaṃ¹²² vande sarvavyādhiharaṃ¹²³ gurum^{124//}
- (1.2) ādau tāvan¹²⁵ mantri¹²⁶ mukhaśaucādikaṃ kṛtvā mano'nukūle¹²⁷ sthāne sukhāsanopaviṣṭaḥ^{128/129}
- (2.1.1) śukla-akārapariṇatam candramaṇḍalam¹³¹ tadupari¹³² śuklahriḥkāraṃ¹³³ hr̥di paśyet/¹³⁴ tadraśmibhis¹³⁵ traidhātukam¹³⁶ avabhāsyākaniṣṭhabhuvanavartinam¹³⁷ siṃhanādam sarvagurubuddhabodhisattvān ākr̥ṣya purata¹³⁸ ākāśadeśe¹³⁹ samsthāpya^{140/141}
- (2.1.2) tadanu pūjāpāpadeśanādikaṃ¹⁴² kṛtvā caturbrahmavihārān vibhāvya/¹⁴³ om¹⁴⁴ śūnyatājñānavajrasvabhāvāḥ¹⁴⁵ sarvadharmāḥ^{146/147} om¹⁴⁸ śūnyatājñānavajrasvabhāvātma¹⁴⁹ 'ham¹⁵⁰ ity ena¹⁵¹ mantreṇa śūnyatām adhiṣṭhet/¹⁵²
- (2.1.3) tataḥ¹⁵³ pranidhānam¹⁵⁴ anusmṛtya¹⁵⁵ śuklapaṃkārapariṇatam¹⁵⁶ 157-kamalam¹⁵⁸ tadupari-¹⁵⁷ śukla-akārapariṇatam¹⁵⁹ candra-
maṇḍalam¹⁶⁰ tadupari śukla-āḥkārapariṇatam¹⁶¹ śvetasiṃham^{162/163} tadupari śukla-aṃkārapariṇatam¹⁶⁴ śvetapadmam¹⁶⁵ tadvaraṭake śuklahriḥkāraṃ¹⁶⁶ sphuradraśmivisaram/¹⁶⁷
- (2.2.1) etat sarvam¹⁶⁸ pariṇamya¹⁶⁹ siṃhanādarūpam¹⁷⁰ ātmānam¹⁷¹ paśyet^{172/173}
- (2.2.2) sarvāṅgaśuklam¹⁷⁴ dvibhujam ekamukham trinetraṃ¹⁷⁵ jaṭāmukūṭa-dharam¹⁷⁶ amitābhālamkṛtaśirasam¹⁷⁷ mākārājālayā sthitam¹⁷⁸ siṃhāsane¹⁷⁹ vyāghracarmābaradharam¹⁸⁰ sphuratpañca-tathāgatam¹⁸¹ aṃsalulitapañcacāram¹⁸² ardhaandrālamkṛtam^{183/184}
- (2.2.3) vāmahastasthitaśuklapadmopari sitakhaḍgam¹⁸⁵ tatsamīpasthitam śuklapadmopari nānāsugandhikusumaparipūrṇaśuklakaroṭakam^{186/187}
- (2.2.4) dakṣiṇe sitapadmopari sitaphaṇiveṣṭitam¹⁸⁸ sitatrisūladaṇḍam^{189/190}
- (2.2.5) evaṃbhūtam¹⁹¹ bhagavantam dhyātvā¹⁹² dhyānāt¹⁹³ khinno mantri mantram¹⁹⁴ japet/¹⁹⁵ tatrāyam¹⁹⁶ mantraḥ^{197/198} om āḥ siṃhanāda¹⁹⁹ hūm²⁰⁰ phaṭ svāhā/²⁰¹
- (3.1) vidhir atra pratimākṛteḥ²⁰² paṭagatasya vā bhagavataḥ²⁰⁴ purataḥ pratimaṇḍalam ekavāradhāraṇyā^{205/206}
- (3.2) tatreyam²⁰⁷ dhāraṇī/²⁰⁸ namo ratnatrayāya²⁰⁹ nama²¹⁰ āryāvalokiteśvara²¹¹ bodhisattvāya²¹² mahāsattvāya²¹³ mahākāruṇikāya^{214/215} tad yathā/²¹⁶ om akāṭe vikāṭe nikāṭe²¹⁷ kaṭamkaṭe²¹⁸ karōṭaviryē²¹⁹ svāhā/²²⁰

- (3.3) apatitagomayam abhimantrya aṣṭau maṇḍalakān²²¹ kuryāt/
 (3.4) pratimaṇḍalaṃ trayodaśavārān²²² āvartayan²²³ dhāraṇīm²²⁴ prati-
 maṇḍalāmalitaśesagomayaṃ²²⁵ dhāraṇyā²²⁶ saptavārān abhi-
 mantrya²²⁷ tena vyādhiṃ²²⁸ pralepayet/²²⁹
 (3.5) saptame divase trayodaśe²³⁰ divase ekaviṃśatitame²³¹ vā²³²
 pañcānantaryakāriṇo 'pi sidhyanti^{233/234} 235-yadi na sidhyanti-^{235236/237}
 tadā 'haṃ pañcānantaryakāri²³⁸ syām²³⁹
 //iti²⁴⁰ siṃhanādasādhanam²⁴¹ samāptam^{242/243}
 (4) //²⁴⁴vidhāya sādhanam dhanyaṃ²⁴⁵
 yad alābhi śubham mayā/²⁴⁶
 siṃhanādasya nāthasya
 nirvyādhi²⁴⁷ syāt²⁴⁸ tato²⁴⁹ jagat//
 //²⁵⁰kṛtir iyaṃ paṇḍitāvadhūtaśrīmadadvayavajrapādānām//

- 117 S1-S5, S7 add//
 118 S5 triṇotram
 119 S1 sihavāhānaṃ, S2 siṃhavāhenam, S4 siṃhavāhana
 120 S1, S3-S5, S7 om.
 121 S1 sihanādamam, S4 sihanādam
 122 S1 om.
 123 S4 -hara
 124 S1, S4 guru
 125 S2, S5 tāvat
 126 S1 mantri
 127 S1 'nukule, S4 'nukula
 128 S1 -nopaviṣṭa, S4 -naupaviṣṭaḥ
 129 B om./, S1, S3-S5//
 130 S2, S3, S5, S7 śukla-amkāra-, S4 śukla-omkāra-
 131 S2, S7 ins./
 132 S1 -parī
 133 S1, S3-S5 śuklahrī-
 134 S1-S4, S7 om./
 135 S5 tatraśminābhis
 136 S1 -dhatukam
 137 S1, S4 bhuvanavarttina, S3 bhuvanavarttina
 138 S5 ins./
 139 S5 purataḥ ākāśadeśe
 140 S1 sathāpya
 141 B, S5, S7 om./
 142 S3 -deśenādikam
 143 B om./, S1, S3, S5//
 144 B om.
 145 S1 śūnyatām jñānavajasvabhātmake, S3 śūnyatām jñānavajasvabhāvātmake,
 S4 śūnyatājñānavajrasvabhāvātmake-, S5 śūnyatām jñānavajrasvabhāvāḥ
 146 S1 sarvadharmmā
 147 B, S1-S3 om./
 148 S5 śūnyatām jñāna-
 149 S1 -vajasvabhātmake-

- 150 S2, S4 ins./, S1, S3, S5, S7 ins.//
 151 S1 itenena
 152 S1, S3, S5//, S7(?) om./
 153 S1 tata
 154 S1, S3 praṇidhāna, S5 praṇidhānasam
 155 S1 samayanusmṛtya, S3 samanusrṛtya
 156 S1 śuklapaṃkāraparāṇatam, S2 śuklapaṃkāraparīnatam, S5 paṃkāraparīnatam,
 S7 śukla-aṃkāraparīnatam
 157 S1, S3-S5, S7 om.
 158 S2, S4, S7 ins./
 159 S1, S3-S5, S7 om., S2 śukla-aṃkāraparīnatam
 160 S1-S5, S7 ins./
 161 S1, S5 śukla-ākāraparīnatam, S2 śukla-āḥkāraparīnata, S3 śuklaḥ āḥkāraparīnatam,
 S3 ins./
 162 S2 śvetasīmha
 163 B, S1-S3 om./, S5 ins.//
 164 S5 śukla-akāraparīnatam
 165 S1-S5, S7 ins./
 166 S1 -hrikāra
 167 B om./
 168 S1, S2, sarvva
 169 S2 pariṇamya
 170 S2 śiṃhanādam
 171 S1 ātmāna
 172 S1 paśyata
 173 B om./, S1, S5//
 174 S1 sarvaṅgaṃ śuklaṃ
 175 S7 ins./
 176 S1 jaṭāmukṭidhara, S2 jaṭamakuṭadharaṃ, S3 jaṭamakuṭidharaṃ, S2, S4, S7 ins./
 177 B amitābhālaṅkṛtaśrasaṃ, S1, S3 amitābhālaṅkṛtaśiraṃ, S4 apitābhālaṅkṛtaśirasa,
 S5 amitābhālaṅkṛtaśiraṃ
 178 S4, S5 -taḥ, S1 ins.//, S3, S4, S7 ins./
 179 S1 sihāsanam, S2-S5, S7 śiṃhāsanam, S1-S4, S7 ins./
 180 S2-S5, S7 ins./
 181 S1-S5, S7 ins./
 182 S1 atsalulitapañcacīra, S2 apśūlūlitapañcacīram, S3 atsalulitapañcavīram, S4 atsa-
 lulitapañcavīram, S1, S3, S4, S7 ins./
 183 B -candraṅkṛtam, S7 -candraṅkitam
 184 B om./
 185 S2, S4, S7 ins./
 186 S4 -pūrṇakroṭakam
 187 B om.
 188 S2 -niveṣṭitam, S4 om, S7 -niveṣṭita
 189 S4 sitaphatriśūladanḍam
 190 B om./
 191 S1 -bhūta
 192 S1, S4, S7 ins./
 193 S1 dhyānat
 194 S1, S7 mantra
 195 S5 //
 196 S1 tatrāya

- 197 S1 mantra
198 B om./, S1-S5 ins.//
199 S5 śiṃhanādāya
200 B huṃ
201 S1-S3, S5, S7 //
202 S5 -te
203 S3 paṭūg-
204 S1 bhagavantaḥ
205 S1, S3 pratimaṇḍalamekavārādhāranyā, S4 pratimaṇḍalanamekavārādhāranyā, S5
pratimaṇḍalamekavārādhāranyāḥ
206 S2 om. S1, S3 //
207 S1 tatrāyam, S4 tatraiyam, S5 tatrāyam
208 B om./, S2, S3, S5 ins.//
209 S1, S3, S5 ins./
210 S1 namo, S2, S5 namaḥ
211 S5 ins./
212 S5 ins./
213 S4 om.
214 S1, S3 -karuṇikāya, S2 -kāruṇikāya, S5 -kārūnikāya
215 S3, S4, S7 om./
216 S2, S4 ins.//, S7 om./
217 S1 trikaṭe, S2-S4 ins. trikaṭe, S5 om.
218 S1 kaṭakaṃṭe
219 S2, S3 karoṭaviryya, S4 roṭaviryya
220 S1-S5, S7//
221 S1 -kā
222 S2 vānān
223 S1 āvarttayen, S2 āvarttayena
224 S2-S4, S7 ins./, S5 dhāraṇī
225 S1, S2 apatitamaṇḍalamalitaśeṣagomayan, S4 apatitamaṇḍalamalitaśeṣagamaya, S3,
S5 apatitamaṇḍalammalitaśeṣagamayan
226 S1, S2-S5, S7 dhāraṇī
227 S1 bhimantrā
228 S1, S5 vyāpi, S2-S4 vyādhi
229 B, S2, S4, S7 om./, S1, S3, S5 //
230 S4 trayodaśa, S7 trayodaśame
231 S1 -viśatime, S2-S4, S7 -viṃśatime
232 S4 cā, S5 ins./
233 S1-S4, S7 sidhyati, S5 om.
234 B, S1, S3-S5 om./
235 S5 om.
236 S2-S4, S7(?) sidhyati
237 B, S1, S3-S5, S7 om./
238 S1 pañcānantaryakāri
239 B, S2, S4, S5, S7 ins./, S1, S3 ins.//
240 B, S1, S3-S5, S7 om.
241 S1 śiṃhanādasādhana, S2 śrisiṃhanādasādhanam
242 S1 -ptaḥ
243 S1-S5, S7 //
244 B om.//
245 S1, S3, S4 dhanyāya, S2, S7 dhanyā

- 246 S4 //, S5 om./
 247 S1, S5 nivvādi
 248 S1 syāta
 249 S1 om.
 250 B/, S2, S4, S7 om.
 251 S4 paṇḍitāvadhuta-
 252 S5 -madvay-

No. 20

²⁵³namaḥ²⁵⁴ śiṃhanādāya/²⁵⁵

- (1) prathamam mukhaśaucādikam²⁵⁶ kṛtvā sukhāsanastho²⁵⁷
 (2.1.1) yogī svahr̥di sūryamaṇḍale āḥkāram²⁵⁸ dṛṣṭvā²⁵⁹ purato²⁶⁰ guru-
 buddhādīn²⁶¹ ānīya²⁶² pāpadeśanādikam²⁶³ kuryāt/²⁶⁴
 (2.1.2) tataḥ śūnyatām āmukhīkṛtyādhiṣṭhāya ca praṇiḍhim anusmaret/²⁶⁵
 (2.1.3) tataḥ akārapariṇatam²⁶⁷ ²⁶⁸-hūmkāram²⁶⁹ tatpariṇatam⁻²⁶⁸ candram
 tasyopari omkārapariṇatam²⁷⁰ raktapadmam/²⁷¹
 (2.1.4) tadupari²⁷² āḥkārapariṇatam²⁷³ śvetasiṃham^{274/275} tasyopari candre
 hrīḥkārasambhavam²⁷⁶ śiṃhanādabhaṭṭārakam²⁷⁷
 (2.1.5) śvetam²⁷⁸ jaṭāmakuṭinam²⁷⁹ trinetrām²⁸⁰ dvibhujam²⁸¹ tapasviveśa-
 dharam²⁸² mahārājālayā sthitam/²⁸³
 (2.1.6) vāmahastād utthitapadmopari jvaladūrdhvakhadgam/²⁸⁴ dakṣiṇe sita-
 triśūlam sitaphaṇiveṣṭitam^{285/286} vāme nānāsugandhipuṣpaiḥ pūrṇam
 śvetakapālam
 (2.1.7) amitābhamukuṭinam²⁸⁷ sphuratpañcatathāgatam²⁸⁹ mahānirmāṇa-
 rūpiṇam²⁹⁰ dhyāyāt/²⁹¹
 (2.1.8) japamantraḥ^{292/293} om āḥ hrīḥ śiṃhanāda²⁹⁴ hūm²⁹⁵ phaṭ²⁹⁶
 //iti²⁹⁷ śiṃhanādasādhanam²⁹⁸//

- 253 S1-S5, S7 add//
 254 S4 nama
 255 S1-S5, S7 //
 256 S1, S3 mukhaśaucādikam, S4 mukhaśauvādikam
 257 S2 sukhāsanastho, S4 sukhāsanastha
 258 S1, S3, S4 ākāram
 259 S1, S2, S4 ins./, S3 ins.//
 260 S1 purato, S2 tato
 261 S4 -dīnām
 262 S4 nīya
 263 S7 -śādikam
 264 S4, S5 //
 265 S1 mumukhī-
 266 S5 //
 267 S1 ākārapariṇatam, S2 āḥkārapariṇatam, S3, S4, S5 ākārapariṇatam, 27 amkāra-
 pariṇatam

- 268 B, S7 om.
 269 S4 huṃkāraṃ, S5 hūṃkāra
 270 S1, S3, S4 omkāraṃ pariṇataṃ, S5 adds candraṃ tasyopari omkārapariṇataṃ
 271 B, S1, S3, S4, S7 om./
 272 S1 tadpariṇataṃ
 273 S1 om. S2 āḥkārapariṇata, S3, S4 ākārapariṇataṃ
 274 S1 śvatasimḥam, S2 śvetasiha
 275 B om./, S7 ins. te
 276 S2 -sabhava
 277 S1 sihanādabhaṭṭāraḥ, S2 simḥanādabhaṭṭāra, S4, S5 simḥanādaṃ bhaṭṭāraḥ
 278 S2 -ta
 279 S1, S4 jaṭāmukuṭinaṃ, S2 jutāmākuṭina, S7 ins./
 280 S1, S2 -tra
 281 S1 -ja, S1-S4, S7 ins./
 282 S2 om. S4 tapaściveṇadharaṃ, S5 tapaśviśadhari, S2, S4, S5, S7 ins./
 283 B om./, S4 //
 284 B om./
 285 S1 -anīveṣṭitaṃ
 286 B, S1, S3, S5 om./, S4 ins.//
 287 S2 -mak-
 288 S2, S7 ins. /
 289 S1 sphulayatpañcatathāgatam, S2, S4 sphārayet pañcatathāgatam, S3 sphurayet pañcatathāgatam, S1-S3, S5, S7 ins. /, S4 ins. //
 290 S1 -ānarūpiṇam-, S2-ānarūpiṇam, S3 ins. /
 291 S1, S4, S5 //
 292 S1, S5, S7 -tra
 293 S1, S2, S4, S5, S7 //
 294 S1 sihanāda, S2 -de
 295 B, S2 huṃ
 296 B /, S3 //
 297 S7 kāi(?)
 298 S7 -aḥ

No. 21

²⁹⁹namo ratnatrayāya/³⁰⁰

- (1) nama³⁰¹ āryāvalokiteśvarāya³⁰² 303-bodhisattvāya mahāsattvāya³⁰⁴
 mahākāruṇikāya³⁰⁵ tadyathā/³⁰⁶ om akate³⁰⁷ vikaṭe nikaṭe
 kaṭamkaṭe³⁰⁸ karote³⁰⁹ karotavīrye³¹⁰ svāhā/³¹¹
 (2.1) eṣā³¹² bhagavata āryāvalokiteśvarasya^{-303 313} purataḥ³¹⁴ pratyūṣe³¹⁵
 apatitagomayenaṣṭaumaṇḍalakān³¹⁶ kṛtvā³¹⁷ pratimaṇḍalam³¹⁸
 trayodaśavārān³¹⁹ uccārayitavyā/³²⁰
 (2.2) tataḥ saptavārān gomayaśeṣam abhimantrya vyādhim upalepayet^{321/322}
 (3) sarvavyādhīn³²³ upaśamayati/³²⁴ yadi saptame divase trayodaśe vā
 ekaviṃśatitame³²⁵ vā divase pañcāntaryakāriṇo 'pi na sidhyanti^{326/327}
 tadā ahaṃ³²⁸ pañcāntaryakāri³²⁹ syām iti³³⁰
 //simḥanādānām³³¹ dhāraṇī samāptā³³²//

- 299 S1-S5, S7 //
- 300 S1, S7 om. //, S2, S4 //
- 301 S1, S2 namo, S5 namaḥ
- 302 S4 -rasya
- 303 S4 om.
- 304 S2 om.
- 305 S1 mahākārunikāya, S5 mahākāruṇikāya, S1, S5 ins. //, S2, S3, S7 ins. /
- 306 S1, S5 ins. //
- 307 S1 akate
- 308 S1 kaṭakaṃṭe
- 309 S5 karotake
- 310 B karotavīrya, S5 roṭavīrya
- 311 S1-S3, S5, S7 //, S4 om. /
- 312 S2 eṣāṃ
- 313 S1 āryāvalokiteś---sya
- 314 S4 pūrataḥ
- 315 S1, S3, S4 -yūṣe, S5 -yūṣa
- 316 S4 -mayanāṣṭau
- 317 S1 akṛtvā
- 318 S1 -la
- 319 S4 -śaṃ vārān
- 320 S4 //, S5 om. /
- 321 S4 -lapayet
- 322 B, S7 om. /, S1, S3-S5 //
- 323 S2, S3 sarvvavyādhin, S5 sarvvavyādhiṃ
- 324 S4, S5 //
- 325 S1, S2, S4 -viṃśatime, S3 -viṃśati
- 326 S1, S2 siddhyati, S3, S4 sidhyati
- 327 B, S4, S7 om. /
- 328 S1, S3-S5 om.
- 329 S1, S4 -taryakāri
- 330 B ins. /, S3 //
- 331 S1, S4, S5 śiṃhanādānāma, S2 iti śriśiṃhanādānām
- 332 S2 samāptaṃ

Nos. 22, 23

333-namaḥ śiṃhanādāya/-333

- (1) ³³⁴prathamam³³⁵ tāvan³³⁶ mantrī mukhaśaucādikaṃ kṛtvā³³⁷- mṛdu-
viṣṭare upaviśya sukhāsanasthaḥ³³⁸⁻³³⁷
- (2.1.1) svahṛdi candramaṇḍale sitahrīḥkāram³⁴¹ drṣṭvā³⁴² tadraśmisamākṛṣṭān³⁴³
purato³⁴⁴ gurubuddhabodhisattvān dhyāyāt/³⁴⁵
- (2.1.2) tadanu³⁴⁶ pūjāpāpadeśanādikaṃ kṛtvā śūnyatām³⁴⁷ vibhāvya/³⁴⁸ 349-om
śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako 'ham³⁵¹ ity³⁵² anenādhitīṣṭhet/³⁵⁴
- (2.1.3) tato-³⁴⁹ jhaṭīti paṃkārapariṇatam³⁵⁵ raktapadmam³⁵⁶ tadupari³⁵⁷ śiṃ-
kārapariṇatam³⁵⁸ śvetasiṃham/³⁶⁰
- (2.2.1) tasyopari candre³⁶¹ hrīḥkārasambhavam śiṃhanādalokeśvararūpam³⁶²

- ātmanāṃ dhyāyāt/³⁶³
- (2.2.2) śuklam amitābhajaṭāmukūṭinaṃ³⁶⁴ trinetraṃ³⁶⁵ dvibhujāṃ³⁶⁶ tapas-
viveśadharaṃ³⁶⁷ mahārājālayā³⁶⁸ sthitam/³⁶⁹
- (2.2.3) vāmahastād³⁷⁰ utthitapadmopari³⁷¹ jvalatkhaḍgaṃ³⁷² dakṣiṇe sitatri-
śūlam sitaphaṇiveṣṭitaṃ³⁷³ vāme³⁷⁴ nānāsugandhipuṣpaiḥ³⁷⁵ pūrṇaṃ³⁷⁶
śvetakapālaṃ³⁷⁷ sphuratpañcatathāgataṃ³⁷⁸ mahānirmāṇarūpiṇaṃ³⁷⁹
dhyāyāt/³⁸⁰
- (2.2.4) ³⁸¹japamantraḥ^{382/383} om āḥ hrīḥ śiṃhanāda³⁸⁴ hūṃ³⁸⁵ phaṭ^{386/387}
- (3.1) ³⁸⁸-tadanantaraṃ³⁸⁹ dhāraṇī bhavati-^{388//390} ³⁹¹-namo ratnatrayāya³⁹²
nama³⁹³ āryāvālokiteśvaraḥ³⁹⁴ bodhisattvāya mahāsattvāya³⁹⁵ mahā-
kāruṇikāya^{396//397} tad yathā//³⁹⁸ om akaṭe vikaṭe nikaṭe³⁹⁹ kaṭaṃ-
kaṭe-³⁹¹ karote⁴⁰⁰ karoṭavīrye⁴⁰¹ svāhā/⁴⁰²
- (3.2) ayaṃ⁴⁰³ mantropacāraḥ⁴⁰⁴ bhagavato 'grataḥ⁴⁰⁵ pratyūṣe⁴⁰⁶ apatita-
gomayenāṣṭau⁴⁰⁷ maṇḍalakān⁴⁰⁸ ⁴⁰⁹-kṛtvā pratimaṇḍalake-⁴⁰⁹ ⁴¹⁰
trayodaś avārān⁴¹¹ uccaret^{412/413}
- (3.3) gomayaśeṣaṃ⁴¹⁴ saptābhimantrya⁴¹⁵ vyādhīn⁴¹⁶ upalepayet/⁴¹⁷
- (3.4) sarvavyādhīn⁴¹⁸ upaśamayati^{419/420} yadi saptame⁴²¹ divase trayodaśe⁴²²
divase⁴²³ ekaviṃśatitame⁴²⁴ vā⁴²⁵ divase⁴²⁶ pañcānantaryakāriṇo 'pi⁴²⁷
na sidhyaty⁴²⁸ ayaṃ⁴²⁹ tadā 'ham⁴³⁰ eva pañcānantaryakārī⁴³²
bhaviṣyāmi^{433/434}

//⁴³⁵siṃhanādasādhanam⁴³⁶//

- 333 S1-S5 om. S6 om namaḥ śiṃhanādāya//
- 334 S1, S2, S4, S5, S7 add //
- 335 S2 -an
- 336 S2 tāvat
- 337 S1-S5, S7 om.
- 338 S6 -sanesthāḥ
- 339 S7 sita / h-
- 340 S4 -hrīḥ // k-
- 341 S2 -kāra
- 342 S2 ins. /
- 343 S2 tadaś-
- 344 S4 puratā
- 345 B om. /, S4-S6 //
- 346 S4 -nū
- 347 S1, S4, S6 śūnyatā
- 348 B om. /, S1, S3-S5 //
- 349 S6 om svabhāvasuddhāḥ sarvadharmā svabhāvasudhohaṃ paścād
- 350 S5 śūnyatāṃ jñāna-
- 351 B, S6 'haṃ
- 352 S3, S5 iti, S5 ins. //
- 353 S2 anān-
- 354 S1, S3-S5 //
- 355 S5 paṃkāreṇa pariṇatāṃ, S6 paṃkāraparinatāṃ,
- 356 S4 raktāṃ padmaṃ, S6 raktapadma

- 357 S1 tadpariṇataṃ, S3 tadpariṇataṃ, S5 tadupariṇataṃ
 358 S1, S3 om. S2 siṃhārapairṇataṃ S6 sikārapariṇataṃ
 359 S6 sika-
 360 B, S1, S3, S5, S6 om. /
 361 S6 candra
 362 S1 -lokeśvarūpam
 363 B om. /, S4-S6 //
 364 S2 -makūṭinaṃ, S4 -makūṭinaṃ, S6 -makūṭinaṃ, S4, S7 ins. /
 365 S1 trinetra, S2, S4, S7 ins. /
 366 S6 dvibhūja, S7 ins. /
 367 S2 tapaśveśadharaṃ, S4 tapaśviveṇadharaṃ, S2, S3, S7 ins. /, S5 ins. //
 368 S1 mahārājājalirayā, S2 saptajalilayā
 369 B, S6 om. /
 370 S6 vāmechastād
 371 S1, S3, S4 utthitapari, S5 utthitepari
 372 S5 -ga, S6 -goṃ, S2-S5, S7 ins. /
 373 S1 sitaphaniveṣṭitaṃ, S4 sitaphaniveṣṭitām, S2, S3, S5, S7 ins. /
 374 S4 vāriṃe, S6 vāmena
 375 S1 nānāsugandhipuṣpaiḥ, S3 nānāsugandhipuṣpaiḥ, S4 nārāsugandhipuṣpaiḥ, S6
 sugandhipuṣpaiḥ
 376 S1, S6, S7(?) pūrṇa
 377 S2 -la, S2 om. S3, S5 ins. /
 378 S2, S4 spharataṃpañcatathāgataṃ, S1-S5 ins. /
 379 S1, S2 -nīrmmānarūpiṇa, S6 -nīrmmānarūpaṃ, S7 -nīrmmānarūpiṇa
 380 S1, S3, S5, S6 //
 381 B, S6 add iti
 382 S6 japamamtra
 383 S1-S6 ins. //
 384 S2 siṃhanāde, S5 siṃhanādāya
 385 B, S4 huṃ
 386 B adds siṃhanādasādhanaṃ samāptam, S6 adds svāhā//iti sādhanasamuccayesiṃha-
 nādālokeśvarasādhana ekonacatvāriṃśādhikaśatatamaṃpaṭala//138
 387 S1-S5, S7 //
 388 S6 om.
 389 S7 tadanatara
 390 B, S5 om. //
 391 S5 om.
 392 S6 -yaḥ, S2 /, S6 //
 393 S1, S3 namaḥ, S2, S4, S6 namo
 394 S6 -lokrtyeśvarāya
 395 S1 om.
 396 S1, S3, S6 -kāriṇikāya
 397 B, S1, S3-S5 om. //, S2 ins. /
 398 B, S4, S5, S7 om. //
 399 S2 -ṭa
 400 S4 karoṭi, S5 karoḷaṭe
 401 S2 karoṭavīryya, S5 rotavīryye, S7 karovīrye
 402 S1-S7 //
 403 S4 aya
 404 S1-S5 ins. //, S6 -ra, S7 ins. /
 405 S6 -ta

- 406 S5 pratyūṣa
 407 S5 -yanṣtau
 408 S6 -la
 409 S6 om.
 410 S4 -maṇḍaleke
 411 S4 trayodavārān, S6 trayodaśamvārān
 412 S1, S3, S4 uccārayet, S6 uccārayat
 413 S1, S4, S5 //, S6, S7 om. /
 414 S2 -ṣa
 415 S1, S2 saptabhimantrya, S3 saptabhimantrya, S6 saptābhirmatra
 416 S1, S2, S5 vyādhim, S7 vyādhim
 417 ॐ, S6 om. /, S1, S3, S5 ins. //
 418 S1, S6 -dhin, S5 -dhim
 419 S4 upaśamayanti, S6 upaśamayeti
 420 S5 //, S6 om. /
 421 S2 same
 422 S2 -daśane, S6 -daśa
 423 S2 diśe
 424 S1 viśatitame, S5 ekaviṃśati, S6 ekaviṃśatime
 425 S1, S3, S6 va, S5 om.
 426 S6 divaśe
 427 S6 -naṃtaryyekāriṇāpi
 428 S2 siddhyati, S6 sidhyet
 429 S5 eyaṃ, S6 ayan, S1-S4, S7 ins. /
 430 S6 ahamy
 431 S1 pacān-
 432 S1 pacānantaryyakāli, S6 pacānantaryyekāri
 433 S6 bhaviṣyati
 434 S1, S2, S4, S5, S7 om. /, S3, S6 //
 435 S2 om. //
 436 B siṃhanādadhāraṇī samāptā, S1 iti siṃhanādasādhanam, S6 // iti sādhanasamuccayasīṃhanādalokeśvarasādhanacatvāriṃśādhikaśatatamapaṭalaḥ // 140

No. 25

- (1.1) ⁴³⁷siṃhanādam aham⁴³⁸ vande sarvavyādhiharam gurum⁴³⁹/
 bhāvanāyogamātreṇa⁴⁴⁰ mucyate⁴⁴¹ sarvakilbiṣāt⁴⁴²//⁴⁴³
 (1.2) prathamam⁴⁴⁴ tāvan⁴⁴⁵ mukhaśaucādikam⁴⁴⁶ kṛtvā śucivastraprāvṛtaḥ
 pavitrabhūmau sukhāsanopaviṣṭaḥ⁴⁴⁷/⁴⁴⁸
 (2.1.1) svahr̥dī candre hrīḥkāram⁴⁴⁹ vibhāvya⁴⁵⁰ tena raśminākṛṣya sarva-
 tathāgatān pūjayitvā pāpadeśanādikam kuryāt/⁴⁵¹
 (2.1.2) tato maitrikaruṇā⁴⁵² muditopekṣā⁴⁵² ca⁴⁵³ vibhāvya⁴⁵⁴ svabhāvaśuddha-
 mantroccāraṇapūrvakam⁴⁵⁵ śūnyatām⁴⁵⁶ bhāvayet/⁴⁵⁷
 om svabhāvaśuddhāḥ sarvadharmāḥ svabhāvaśuddho 'ham/⁴⁵⁸
 om śūnyatājñānavajrasvabhāvāt⁴⁵⁹mako⁴⁶⁰ 'ham iti/⁴⁶¹
 (2.1.3) etadanantaram⁴⁶² pratibhāsamātrakam⁴⁶³ svakāyam avalokya⁴⁶⁴ rakta-

- rephaparīṇatam⁴⁶⁵ raktā⁴⁶⁶ṣṭadalapadmopari hrīḥkāraparīṇāmena⁴⁶⁷
śvetasiṃham⁴⁶⁸
- (2.2.1) tasyopari prṣṭhacandre⁴⁶⁹ hrīḥkāram⁴⁷⁰ saraśmikaṃ tenaivākṛṣya sarva-
tathāgatapraveśenātmānam⁴⁷² siṃhanādalokeśvararūpam⁴⁷³
bhāvayet/⁴⁷⁴
- (2.2.2) śvetavarṇam⁴⁷⁵ trinetrām⁴⁷⁶ jaṭāmukuṭīnam⁴⁷⁷ nirbhūṣaṇam⁴⁷⁸
vyāghracarmaprāvṛtam⁴⁷⁹ siṃhāsanastham⁴⁸⁰ mahārājajilām⁴⁸¹
candrāsanam⁴⁸² candraprabham bhāvayet/⁴⁸³
- (2.2.3) dakṣiṇe⁴⁸⁴ sitaphaṇiveṣṭitam⁴⁸⁷ trisūlam⁴⁸⁵ śvetam⁴⁸⁶ vāme nānā-
sugandhikusumaparipūrītapadmabhājanam⁴⁸⁸ vāmahastād
utthapadmopari⁴⁸⁹ jvalatkhaḍgam⁴⁹⁰ svakāye⁴⁹¹ pañcatathāgatam⁴⁹²
sphurantam⁴⁹³ paśyēt/⁴⁹⁴
- (2.2.4) tato⁴⁹⁵ hr̥dbjienākṛṣya⁴⁹⁶ jñānasattvam praveśayitvā tathāgatān⁴⁹⁷
sphāryā⁴⁹⁸ bhiṣīced⁴⁹⁹ ātmānam maulāv amitābhamudraṇam⁵⁰⁰
cintayet/⁵⁰¹
- (2.2.5) tato mantram japet devatāmūrtinā^{502/503} tatrāyam⁵⁰⁴ mantraḥ^{505/506}
om āḥ hrīḥ⁵⁰⁷ siṃhanāda⁵⁰⁸ hūm⁵⁰⁹ phaṭ svāhā/⁵¹⁰
- (3.1) tadanu sugandhādimaṇḍalam kṛtvā pūjārtham⁵¹¹ puṣpādikaṃ⁵¹²
ḍhaukayitvā⁵¹³ arcayet/⁵¹⁴
- (3.2) punar mālāmantram japet/^{515/516}
om⁵¹⁷ namo ratnatrayāya⁵¹⁸ nama⁵¹⁹ āryāvalokiteśvarāya bodhisattvāya
mahāsattvāya mahākāruṇikāya/⁵²⁰ tadyathā/⁵²¹
om akāṭe vikāṭe nikāṭe⁵²² kaṭamkaṭe karote⁵²³ karotavīrye⁵²⁴ svāhā/⁵²⁵
- (3.3) anena mantreṇa maṇḍalamṛttikām⁵²⁶ gr̥hītvā ekaviṃśativārān⁵²⁷
āvartya⁵²⁸ vyādhiṃ⁵²⁹ prelapyā svastho⁵³⁰ bhavati/⁵³¹
//iti⁵³² śrīsiṃhanādalokeśvarasādhanaṃ^{533/534} samāptam⁵³⁵//

437 S1-S4, S7 add //

438 S1 aha

439 S1 guru

440 S4 -yomātreṇa

441 S1 mucyete

442 S1, S3, S5 sarvvakilbiṣaḥ, S2 sarvvakilbīṣaiḥ, S4, S7 sarvvakilbiṣaiḥ

443 S2 /

444 S1, S3 -an

445 B, S2 tāvat

446 S4 mukhaṇauvādikaṃ

447 S1 -ṭa

448 B, S1, S3-S5 om. /

449 S1 hrīkāram

450 S5 ins. /

451 S5 //

452 S1, S3-S5 -pekṣām

453 S1, S3 catu, S2 ccha, S5 catur

454 S1, S3, S5 /

- 455 S5 -dharmam̐troccāraṇaḥ
 456 S1 śūnyatā
 457 B om. /, S4, S5 //
 458 B, S4 om. /, S5 //
 459 S3, S4 śūnyatām̐ jñāna-
 460 S1 bhātmako-
 461 S1-S5, S7 //
 462 S1 tadanantara, S3 tadantaraṃ, S5 tadanantaraṃ
 463 S2 -susam-
 464 S4 avaloke
 465 S1-S4, S7 -ta
 466 S1 raktaṣṭadala-, S4 rektadala-
 467 S1 -meṇa
 468 S4, S7 -siṃha
 469 S1 -dreḥ, S5 -dra
 470 S7 hrikāraṃ
 471 S4 tainai-
 472 S2 -praśenātmāmānaṃ, S5 -praveśyamānaṃ
 473 B siṃhanādaṃ lokeśvaraṃpūpaṃ, S4 siṃhanādalikeśvararūpaṃ
 474 B om. /, S1, S3, S5 //
 475 S1, S2, S5 -ṇa
 476 S2 -tra
 477 S2, S4 -maku-, S4 ins. /
 478 S1 nibhūṣanaṃ, S2 ins. /
 479 S4 -carmaṃprākṛtaṃ, S2 ins. /
 480 S1 sihāsa-
 481 S2 -lira
 482 S2 candrāsana
 483 S2 -ta
 484 S4 -ne
 485 S1 triśūra
 486 S2, S4, S7 ins. /
 487 S1 -pūrīta-, S5 pūjita-
 488 S1 jana, S5 ins. //
 489 S1-S5 utthaṃ padmopari, S7 upasthitaṃ padmopari
 490 S1, S3-S5 ins. /
 491 S2, S3 svakāya
 492 S2 -ta
 493 S1 sphuranta, S2 spharaṃtaṃ, S5 spharantaṃ
 494 S1, S3, S5 //, S4, S7 om. /
 495 S5 tata
 496 S1 hṛdbijen-, S2 hṛdbījan-, S5 svahṛdvijen-
 497 S5 -tā
 498 S2 saṃsphāryyā-
 499 S1 -bhiceñced, S4 -bhiñcad
 500 S7 (?) -ṇañ
 501 S1, S3-S5 //
 502 S2 -murttinā
 503 S5 //
 504 S1 tatrayaṃ
 505 S5 -ra

- 506 S2, S4, S5 //
- 507 S1, S3 hrī
- 508 S1 siṃhana, S2 siṃhanādāya
- 509 B huṃ, B, S1-S5 ins. /, S7 //
- 510 S1-S5, S7 //
- 511 S1 pūjārtha, S5 pūjādi
- 512 S1, S3 pūṣ-
- 513 S1, S3 dhauvayitvā, S4 tokayitvā
- 514 S1, S3, S5 //
- 515 S1 pūnarmmālā-, S2 punasmālā-
- 516 S1, S3, S5 //
- 517 S2-S5, S7 om.
- 518 S2 ins. //
- 519 S2 namaḥ
- 520 S1, S4, S7 om. /
- 521 S4, S5 ins. //
- 522 S1, S3, S5 ins. kaṭe, S2 ins. trikaṭe
- 523 S5 karokaṭe
- 524 S1 karoṭavīrya
- 525 S1-S5, S7 //
- 526 S1 -mūttikāṃ, S3, S5 -mūrttikāṃ, S4 -mūrttikāṃ
- 527 S1, S2 ekaviśativārān
- 528 S2, S4 āvarttā
- 529 S2, S3, S5 vyādhi
- 530 S1 svasthe, S2 svastha, S5 svasthā
- 531 S1, S3, S5 //, S2, S4, S7 om. /
- 532 S1, S3, S4, S7 om.
- 533 B, S1, S3-S5, S7 siṃha-
- 534 S1, S3, S7 -sādhana
- 535 S7 om.

6 チベット語テキスト

No. 17, T 3

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha nam/ bod skad du/ seṅ ge sgra'i sgrub
thabs/

rje btsun seṅ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1.1) źal gcig phyag gñis sku mdog dkar/ spyān gsum seṅ ge la
gnas śiñ/ bla ma nad kun 'joms byad pa'i/ seṅ ge sgra la
phyag 'tshal lo/
- (1.2) dañ por re źig sñags pas/ kha bsañ pa la sogs la byas te/
yid dañ 'thun pa'i gnas su gdan⁵³⁶ bde ba la ñe bar 'dug
ste/

- (2.1.1) a⁵³⁷ yig dkar po yoñs su gyur pa las zla ba'i dkyil 'khor/
de'i sten du hrīḥ yig dkar po sñiñ gar bltas la/ de'i 'od
zer gyi khams gsum snañ bar byas te/ 'og min gyi gnas su
soñ ste/ señ ge sgra dañ/ bla ma dañ/ sañs rgyas dañ/ byañ
chub sems dpa' thams cad gdan drañs te/ mdun gyi nam mkha'
la bźugs nas/
- (2.1.2) de'i rjes su mchod pa dañ/ sdig pa bśags pa la sogs pa
bya'o/ de nas tshañs pa'i gnas bži bsgom⁵³⁸ par byas nas/
om śū nya tā dzñā na bdzra swa bhā wa⁵³⁹ ātma ko haṃ źes
pa'i sñags 'dis stoñ pa ñid du byin gyis brlab par bya'o/
- (2.1.3) de nas smon lam rjes su dran par byas nas paṃ yig dkar po
yoñs su gyur pa las padma/de'i sten du a⁵⁴⁰ yig dkar po
yoñs su gyur pa las zla ba'i dkyil 'khor/ de'i steñ du āḥ
yig dkar po yoñs su gyur pa las/ señ ge dkar po/ de'i steñ
du aṃ yig dkar po yoñs su gyur pa las padma dkar po/ de'i
lte ba la hrīḥ yig dkar po 'od zer 'phro źiñ 'gyed pa/
- (2.2.1) de thams cad yoñs su gyur pa las señ ge sgra'i gzugs su
bdag ñid blta bar bya'o/
- (2.2.2) yan lag thams cad dkar źiñ źal gcig phyag gñis pa/ spyan
gsum pa ral pa'i cod pan bciñs pa/ 'od dpag tu med pas dbu
brgyan pa/ rgyal po chan po rol pa'i stabs kyis señ ge'i
khri la bźugs pa/ stag gi pags pa'i na bza' bsnams pa/ de
bźin gśegs pa lña 'phro źiñ rol pa'i dpa' bo lña dañ zla
ba phyed pas brgyan pa/
- (2.2.3) phyag g'yon na padma dkar po'i steñ du ral gri dkar po
dañ/ de dañ ñe bar gnas pa'i padma dkar po'i steñ du me
tog dri bzañ⁵⁴¹ sna tshogs pas yoñs su gañ ba'i thod pa dkar
po/
- (2.2.4) g'yas na padma dkar po'i steñ na sprul dkar pos dkris pa'i
dbyu⁵⁴² gu⁵⁴² rtse gsum pa dkar po'o/
- (2.2.5) de lta bur gyur pa'i bcom ldan 'das bsgom par bya'o/
bsgom pas ñal na sñags bzlas par bya'o/ de la sñags ni
'di'o/ om āḥ hrīḥ siṃ ha nā da hūṃ/ phaṭ swāhā/
- (3.1) cho ga 'dis sku gzugs byas te/ yañ na ras bris⁵⁴³ byas la/
bcom ldan 'das kyī mdun du so so'i mañḍala byas la gzuñs
lan cig bklag par bya'o/
- (3.2) de la gzuñs ni 'di'o/ na mo ratna trā yā ya/ na ma⁵⁴⁴ ā rā
ba lo ke śwa rā ya/ bo dhi satwā ya/ mahā satwā ya/ma hā
kā ru ñi kā ya/ tadya thā/ om a ka ṭe/ bi ka ṭe ñi ka ṭe/
kaṭaṃ kaṭe/ ka ro ṭaṃ/ bi dya swā hā/
- (3.3) sa la ma lhuñ ba'i lci ba la mñon par bsñags⁵⁴⁵ nas mañḍala
brgyad byas la/ mañḍala so so la lan bcu gsum gyi bar du

- bklag par bya'o/
 (3.4) maṇḍala so so'i dri ma lhag pa'i lci ba de la gzuñs lan
 bdun du mñon par bsñags nas des⁵⁴⁶ nad pa la byug par
 bya'o/
 (3.5) ñi ma bdun nam/ ñi ma bcu gsum mam/ ñi ma ñi su rtša gcig
 gis de bzin du byas pas mtshams med pa lña byad pas kyañ
 'grub par 'gyur ro/ gal te ma grub na de'i tshe ñas
 mtshams med pa lña byas 'gyur ro/ ⁵⁴⁷-señ ge sgra'i sgrub
 thab rdzogs so⁻⁵⁴⁷/
 (4) bdag gi sgrub thabs cho ga 'dis/ gañ žig nor dañ dge thob
 ciñ/ mgon po señ ge sgra dañ ni/ 'gro ba rnams ni nad med
 žog/ pañḍi ta a ba dhu ti dpal ldan gñis med rdo rje žabs
 kyis mdzad pa'o⁵⁴⁸//

536 P stan

537 P om

538 P bsgoms

539 P ba, P ins. sarba dharmāḥ om śūnya tā dzñā na bdzra swa bhā ba

540 P om

541 P ins. po

542 P dbyug

543 D ris

544 P maḥ

545 P sñags

546 P de yis

547 D om.

548 P pa rdzogs so //

No. 20, T 1

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha nam/ bod skad du/ señ ge sgra'i sgrub
 thabs/

señ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) dañ por gdoñ bkru ba la sogs pa byas nas bde ba'i stan la
 gnas te/
 (2.1.1) rnal 'byor pas rañ gi sñiñ gar ñi ma'i dkyil 'khor la yi
 ge a bltas pas mdun du bla ma dañ sañs rgyas la sogs pa
 sbyan drañs la sdig pa bsags pa la sogs pa rnams bya'o/
 (2.1.2) de nas stoñ pa ñid mñon du byas śiñ byin gyus kyañ brlabs
 la/ smon lam rjes su dran par bya ste/
 (2.1.3) de las āḥ'i rnam pa yoñs su gyur pa las yi ge hūṃ do/ de
 yoñs su gyur pa las zla ba'o/ de'i steñ du yi ge om yoñs
 su gyur pa las padma dmar po/ de yi ge āḥ yoñs su gyur pa

- las señ ge dkar po'o⁵⁴⁹/
(2.1.4) de'i steñ du yi ge hrīḥ las byuñ ba'i rje btsun señ ge
sgra ste/
(2.1.5) dkar po phyog gñis pa ral pa dañ dbu rbyan dañ ldan pa
dbyan gsum pa dkar thub kyi cha lugs 'dzin pa rgyal po
chen po'i stabs su bžugs pa
(2.1.6) phyag g'yon pa nag gnas pa'i padma'i/ steñ na ral gri 'bar
ba gyen du lañs pa'o/ g'yas na rtse gsum dkar po la sbrul
dkar po gdeñs ka can gyis dkyis pa'o/ g'yon na me tog dri
žim po sna tshogs kyi yoñs su bkañ ba'i thod ba dkar po/
(2.1.7) dbu rgyan la mi bskyod pa bžugs pa de bžin bśeḡs pa lña
spro bar⁵⁵⁰ mdzad pa/ sprul pa chen po'i skur gyur pa bsgom
par bya'o/
(2.1.8) bzlas pa'i sñags ni om āḥ hrīḥ siṃ ha na da hūṃ phaṭ/
'di ni señ ge sgrub thabs so//
dge sloñ tshul khriṃs rgyal mtshan gyis bsgyur ba'o//

549 P om.

550 P om.

No. 20, T 3

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha naṃ/ bod skad du/ señ ge sgra'i sgrub
thabs/

rje btsun señ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) rnal 'byor pas dañ por kha bsañ ba la sogs pa byas nas
stan bde ba la 'dug ste/
(2.1.1) rañ gi sñiñ ga ñi ma'i dkyil 'khor la āḥ⁵⁵¹ yig bltas nas
mdun du bla ma dañ/ sañs rgyas la sogs pa gdan drañs nas
sdig pa bśags pa la sogs pa bya'o/
(2.1.2) de nas stoñ pa ñid mñon du byas siñ byin gyis brlabs nas
smon lam rjes su dran par bya'o/
(2.1.3) de nas a⁵⁵² yig yoñs su gyur pa las hūṃ yig/ de yoñs su
gyur pa las zla ba'i steñ du/ om yig yoñs su gyur pa las
padma dmar po/
(2.1.4) de'i steñ du āḥ yig yoñs su gyur pa las señ ge dkar po/
de'i steñ du zla ba la hrīḥ las byuñ ba'i rje btsun señ ge
sgra
(2.1.5) dkar po ral pa'i cod pan can/ spyen gsum pa/ phyag gñis
pa/ dka' thub kyi cha lugs 'dzin pa/ rgyal po chen po rol
pa'i stabs kyi bžugs pa/

- (2.1.6) phyag g'yon na padma lañs pa'i steñ na 'bar ba'i ral gri
 gyen du 'phyar ba/
 g'yas na sprul dkar pos dkris pa'i rtse gsum dkar po
 bsgoms pa/ g'yon na me tog tri bzañ po sna tshogs pas gañ
 ba'i thod pa dkar po/
 (2.1.7) 'od dpag tu pas dbu rgyan ciñ/ de bžin gśegs pa lña 'phro
 ba sprul pa'i sku chen po bsgom par bya'o/
 (2.1.8) bzlas pa'i sñags ni om āḥ hrīḥ siḥ ha nā da hūḥ phaṭ ces
 so/

551 D reads a
 552 P reads āḥ

No. 21, T 1

rgya gar skad du/ siḥ ha nā da dha rā ṇi/ bod skyad du/ señ ge sgra'i gzuñs/

- (1) na mo ratna tra yā ya/ nama⁵⁵³ arya a ba lo ki te śva ra ya
 bo dhi satvā ya ma hā sat vā ya ma hā ka ru ṇi kā ya/
 tadya thā/ om a ka ṭe bi ka ṭe ṇi ka ṭe ka ṭam ka ṭe ka ro
 ṭa bīr ye svāhā/
 (2.1) 'di ni bcom ldan 'das 'phags pa 'jig rten dbaḥ phyug gi
 mdun du nañ par sña mor ba'i lci ba sa la ma lhuñ bas
 maṇḍala brgyad byas ste/ maṇḍala re re žiñ lan bcu⁵⁵⁴ gsum
 du bzlas par bya ba'o/
 (2.2) de nas lan bdun du ba'i lci ba lhag ma mñon par sñags la
 nad pa la byug par bya ste/
 (3) nad rnams thams cad⁵⁵⁵ ži bar 'gyur ro/ gal te mtshams med
 pa lña byas pas kyañ ṇi ma bdun pa 'am bcu gsum pa 'am ṇi
 ma ṇi śu rtsa gcig pa la yañ ma grub na de'i tshe ṇa ṇid
 kyis mtshams med pa lña byas pa yin žin/ nás sañs rgyas
 bcom ldan 'das rnams bslus par yañ 'gyur ro/
 señ ge sgra žes byas ba'i gzuñs rdzogs so//
 dge sloñ tshul khrims rgyal mtshan gyis bsgyur ba'o//

553 P namaḥ
 554 D om.
 555 P ins. ñe bar

No. 21, T 3

- (1) na mo ratna tra yā ya/ na maḥ ā ryā ba lo ki te śwa rā ya/
 bo dhi satwāya/ mahā satwa ya/ mahā kā ru ṇi kā ya/ tadya

thā/ om̄ a ka ʔe/ bi ka ʔe ɳi ka te/ ka ʧam̄ ka ʔe/ ka ro
ʔe/ ka ro ʧam̄/ birya swāhā/

- (2.1) 'di rnams 'phags pa spyan ras gzigs dbaṅ phyug gi mdun du
sṅar sa la ma lhuṅ ba'i lci ba blaṅs nas maṅḍala brgyad
byas te/ maṅḍala so so la lan bcu gsum bzlas par bya'o/
(2.2) de nas lan bdun pa'i lci ba lhag ma la mñon par bsṅags
nas/ nad pa la ñe bar byug par bya'o/
(3) nad thams cad ñe bar ʒi bar 'gyur ro/ gal te ñi ma bdun
nam/ bcu gsum mam/ ñi šu rtsa gcig tu byas na mtshams med
pa lña byas pas kyaṅ 'grub par 'gyur ro/ gal te ma grub
na⁵⁵⁶ de'i tshaṅs mtshams med pa lña byas par 'gyur ro/
seṅ ge sgra'i sgrub thabs rdzogs so//

556 P nas

Nos. 22, 23, T 1

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha nam̄/ bod skad du/ seṅ ge sgra'i sgrub
thabs/

- (1) daṅ por re ʒig sṅags pas bṅin gyis⁵⁵⁷ gtsaṅ sbra la sogs pa
byas pa bde ba'i stan la gnas te/
(2.1.1) raṅ gi sñiṅ gar zla ba'i dkyil 'khor la yi ge hrīḥ dkar po
dmigs la/ de'i 'od zer gyis legs par spyan draṅs pa'i bla
ma daṅ saṅs rgyas daṅ byaṅ chub sems dpa' rnam mdun du
bsgom par bya ba'o/
(2.1.2) de'i rjes su mchod pa daṅ sdig pa bṅags pa la sogs pa byas
la/ stoṅ pa ñid legs par bsgom par bya ʒiṅ/ om̄ stoṅ pa ñid
kyi ye šes rdo rje'i raṅ bṅin gyi bdag ñid ni ṅa yin no
ʒes bya ba 'dis byin gyis brlab par yaṅ bya ba'o/
(2.1.3) de nas de ma thag tu yi ge paṃ yoṅs su gyur pas padma
dkar po'o/ de'i steṅ du yi ge siṃ⁵⁵⁸ yoṅs su gyur pa las seṅ
ge dkar po'o/
(2.2.1) de'i rgyab tu zla ba la yi ge hrīḥ las kun nas byuṅ ba'i
'jig rten dbaṅ phyug seṅ ge sgra'i skur bdag ñid bsgom par
bya ba'o/
(2.2.2) dkar po phyag gñis pa snaṅ ba mtha' yas daṅ ral pa daṅ
dbu rgyan can/ spyan gsum pa dka' thub kyi cha byad 'dzin
pa rgyal po chen po'i 'gyiṅ bag gyis bṅugs pa/
(2.2.3) phyag g'yon na padma laṅs pa'i steṅ na ral gri laṅs pa'o/
g'yas na rtse gsum dkar po la sbrul dkar po gdeṅs ka daṅ
ldan pas dkris pa'o/ g'yon na me tog dri ʒim po sna tshogs

kyis yoñs su bkañ ba'i thob pa dkar po'o/ de bzin gžegs pa
lña 'phro bar mdzad pa/ mya ñan las 'das pa chen po'i skur
bsgom par bya ba'o/

- (2.2.4) bzlas pa'i sñags ni om̄ āḥ hrīḥ siṃha⁵⁵⁹ nā da hūṃ phaṭ/
(3.1) de'i rjes thogs la ni gzuñs yin te/ dkon mchog gsum la
phyag 'tshal lo/ thugs rje chen po dañ ldan pa'i byañ chub
sems dpa' sems dpa'chen po 'phags pa spyān ras gzigs dbañ
phyug la phyag 'tshal lo/ 'di lta ste/ om̄ a ka ṭe bi ka ṭe
ṇi ka ṭe ka ṭam̄ ka ṭe ka ro ṭa bī ra ye swā hā/
(3.2) bya ba 'di'i rim pa ni pa'i lci ba ma lhañ bar⁵⁶⁰ nañ par
śin tu sña bar bcom ldan 'das kyī spyān sñar maṇḍala
brgyad bya ste/ maṇḍala re re žiñ lan bcu gsum mrjes su
rjod par bya ba'o/
(3.3) ba'i lci ba'i lhag ma lan bdun du mñon par sñags la nad
pha la ñe bar byug par bya ste/
(3.4) nad rnams thams cad ñe bar ži bar byed pha yin no/ gal te
mtshams med pa lña byas pa rnams kyis kyañ ñi ma bdun
nam⁵⁶¹ űi ma bcu gsum mam ñi ma ñi šu rtsa gcig na yañ 'di
'grub par ma gyur na ni/ de'i tshe ña ñid mtshams med pa
lña byed par 'gyur ba yin no/

señ ge sgra'i sgrub thabs so/

pa ṇḍi ta ratna a ka ra'i žal sña nas/ dge sloñ/ tshul khirms rgyal mtshan gyis
bsgyur ba'o//

- 557 D gyi
558 D si
559 P siṃha
560 P bas
561 P nas

Nos. 22, 23, T 2

rgya gar skad du siṃ ha nā da sā dha nam̄/ bod skad du señ ge sgra'i sgrub pa'i
thabs/

'phyags pa señ ge'i sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) dañ por re žig sñags pas gdoñ bkru ba la sogs byas⁵⁶² nas/
bde ba'i gdan la 'dug ste/
(2.1.1) rnal 'byor pas rañ gi sñiñ gar zla ba'i dkyil 'khor la yi
ge hrīḥ bltas la mdun du bla ma dañ/ sañs rgyas dañ/ byañ
chub sems dpa' rnams bsgom par bya'o/
(2.1.2) de'i rjes la mchod pa dañ/ sdig pa bśags pa la sogs pa bas
nas stoñ pa ñid bsgom par bya ste/ om̄ šūñya tā dzñāna

- bdzra sva bhā wa⁵⁶³ ātma ko 'ham/ zēs brjod pas byin gyis
brlabs la/
(2.1.3) de nas skad cig tsam gyis⁵⁶⁴ yi ge paṃ yoṃs su gyur pa las/
padma dmar po de'i steñ du yi ge yoṃs su gyur pa la señ
ge dkar po/
(2.2.1) de'i steñ du zla ba la hriḥ las yañ dag par byuñ ba'i rdze
btsun señ ge sgra'i⁵⁶⁵ sku⁵⁶⁶ gzugs su bsgom⁵⁶⁷ ste⁵⁶⁸/
(2.2.2) sku mdog dkar po ral pa'i thor tshugs can/ spyan gsum pa/
phyag gñis pa/ dka' thub can gyi ḥa byad 'dzin pa/ rgyal
po rol pas⁵⁶⁹ gnas pa'o/
(2.2.3) phyag g'yon pas ni padma bsgeñ ba'i steñ na ral gri 'bar
bas brgyan pa'o/ g'yas su sbrul dkar pos dkris pa'i mduñ
rtse gsum pa'o/ g'yon du dri źim po'i me tog⁵⁷⁰ gi
tshogs kyis bkañ ba'i thod pa dkar po'o/sku las de bzin gśeḡs pa
lña 'phro ba'i gzugs su bsgoms la/
(2.2.4) sñags 'di bzlas bar bya'o/ om āḥ hriḥ siṃ ha na da hūṃ
phaṭ/
(3.1) sñon du bsñen pa 'bum phrag gcig bzlas pa bya'o/ de nas
nam ratna tra yā ya/ nam⁵⁷¹ ārya a ba lo ki te śva rā ya/ bo
dhi sa tva ya/ ma hā satva ya/ ma hā ka ru ṇi kā ya/
tadya thā/ om a ka ṭe bi ka ṭe ni ka ṭe ka ṭam ka ṭe⁵⁷²/ ka ro ṭa
ba re svā hā/
(3.2) 'di'i ñe bar spyod pa ni bcom ldan 'das kyid mdun du gzuñs
sñags 'dis⁵⁷³ sa la lhuñ ba'i lci bas mañḍala brgyad phul
te/ mañḍala re re źiñ lan bcu gsum rjes⁵⁷⁴ su⁵⁷⁴ brjod
par bya'o/
(3.3) de nas lci ba lhag ma de ñid la mñon par sñags te/ lus la
ñe bar dbyugs na
(3.4) nad thams cad rab tu źi bar 'gyur ro/ gal te mtshams med
pa'i las byas⁵⁷⁵ kyañ ñid ma bdun nam bcu bzi 'am/ ñi śu
rtsa gcig gi sa ma grub na de'i tshe bdag gis mtshams med
pa lña byas yin no//

señ ge sgra'i sgrub thabs slob dpon tsandra go mis mdzad pa rdzogs so// pañḍita
don yod rdo rje dañ/ khams pa lo tstsha ba dge sloñ ba ris bsgyur ba'o//

562 P ins. pa

563 P ba

564 P gcis

565 P om.

566 P ins. sprul pa'i

567 P bsgoms

568 P te

569 P pa'i

- 570 P tag
 571 P ins. maḥ
 572 P re
 573 P 'di
 574 P om.
 575 P ins. pas

Nos. 22, 23, T 3

rgya gar skad du/ ā rya siṃ ha nā da sā dha naṃ/ bod skad du/ 'phags pa seṅ
 ge sgra'i sgrub thabs/

rje btsun seṅ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) dañ por re žig sñags pas kha bsañ ba la sogs pa byas nas
 stan bde ba la 'dug te⁵⁷⁶/
- (2.1.1) rañ gi sñiñ gar zla ba'i dkyil 'khor la hrīḥ yig dkar po
 bltas nas/ de'i 'od zer gyis⁵⁷⁷ mdun du bla ma dañ/ sañs
 rgyas dañ/ byañ chub sems dpa' rnam sgdan drañs par bsgoms
 nas/
- (2.1.2) de nas mchod pa dañ/ sdiḡ pa bśags pa la sogs pa byas nas
 stoñ pa ñid bsgom par bya'o/ om śūnya tā dzñā na bdzra swa
 bhā ba ātma ko 'ham⁵⁷⁸/ žes pa 'dis byin gyis brlab par
 bya'o/
- (2.1.3) de nas skad ciḡ gis paṃ yig yoñs su gyur pa las padma dmar
 po/ de'i steñ du siṃ yig yoñs su gyur pa las seṅ ge dkar
 po'o/
- (2.2.1) de'i steñ du zla ba la hrīḥ yig las byuñ ba'i 'jig rten
 dbañ phyug seṅ ge sgra'i skur bdag ñid bsgom par bya'o/
- (2.2.2) sku mdog dkar po ral pa'i cod pan can/ 'od dpag tu med pas
 dbu brgyan pa/'spyan gsum pa/ phyag gñis pa/ dka' thub kyi
 tshul 'dzin pa'o/ rgyal po chen po rol pas bžugs pa/
- (2.2.3) phyag g'yon na padma lañs pa'i steñ du ral gri 'bar ba/
 g'yas na sbrul dkar pos dkris pa'i rtse gsum dkar po/
 g'yon na dri žim po'i me tog sna tshogs pas bkañ ba'i thod
 pa dkar po'o/ de bžin gśegs pa lña 'phro žiñ sbrul⁵⁷⁹ pa
 chen po'i skur bsgom par bya'o/
- (2.2.4) bzlas pa'i sñags ni/ om āḥ hrīḥ si ha nā da hūṃ phaṭ/
- (3.1) de nas gzuñs bzlas te/ na mo ratna tra ya yā/ na ma ārya
 ba lo ki te śwa rā ya/ bo dhi satwa yā/ mahā satwā ya/
 mahā ka ru ñi ka ya/ tadya thā/ om a ka ṭe/ bi ka ṭe ñi ka
 ṭe ka ṭaṃ ka ṭe/ ka ro ṭe/ ka ro ṭaṃ bidyā swāhā/
- (3.2) sñags 'di brjod nas bcom ldan 'das kyi mdun du nam lañs pa
 dañ/ sa la lhuñ ba'i lci ba la mañḡala brgyad byas

- nas maṇḍala so so la lan bcu gsum bzlas par bya'o/
(3.3) lci ba lhag ma la lan bdun mñon par bñags nas nad pa la
byug par bya'o/
(3.4) des nad thams cad ñe⁵⁸⁰ bar⁵⁸⁰ ži bar 'gyur ro/ ñi ma bdun
nam/ ñi ma bcu gsum mam/ ñi šu rtsa gcig de bžin du byas
pas mtshams med pa lña byed pas kyañ 'grub par 'gyur ro/
gal te de'i tše ma grub na ñas mtshams med pa lña byas
par 'gyur ro//
señ ge'i sgra'i sgrub thabs rdzogs so//

576 P ste
577 P gyi
578 P ham
579 P sprul
580 P om.

No. 25, T 3

rgya gar skad du/ śrī siṃ ha nā da sā dha nam/ bod skad du/ dpal⁵⁸¹ señ ge
sgra'i sgrub thabs/

- (1.1) dpal ldan señ ge sgra la phyag 'tshal lo/ nad kum 'joms
byed bla ma ste/ señ ge sgra phyag 'tshal lo/ rnal 'byor
bsgoms pa tsam gyis ni/ sdig pa kun las grol bar 'gyur/
(1.2) dañ por re žig kha bsañ ba la sogs pa byas te/ gos gtsañ
mgon nas sa gži gtsañ mar stan bde ba la ñer bar 'dug ste/
(2.1.1) rañ gi sñiñ gar zla ba la hrīḥ yig bsgom par bya'o/ de'i
'od zer gyis de bžin gšegs pa thams cad gdan drañs te/
mchod par byas nas sdig pa bšags pa la sogs pa bya'o/
(2.1.2) de nas byams pa dañ/ sñiñ rje dañ/ dga' ba dañ/ btañ sñoms
rnams rnam par bsgoms te/ rañ bžin gyis dag pa'i sñags
brjod pa sñon du 'gro bas stoñ pa ñid bsgom pa bya'o/ om
swa bhā ba śuddhaḥ sarba dharmāḥ swa bhā ba śuddhao 'ham⁵⁸²/
om šū nyatā dzñāna bdzra swa bhā wa⁵⁸³ ātma ko ham⁵⁸⁴ žes so/
(2.1.3) de nas rañ gi lus sgra brñan dañ 'dra bar bltas nas ra⁵⁸⁵
yig dmar po yoñs su gyur pa las padma dmar po 'dab ma
brgyad pa'i sten du āḥ yig yoñs su gyur pa las/ señ ge
dkar po/
(2.2.1) de'i steñ du hrīḥ yig de'i 'od zer gyis de bžin gšegs pa
rnams dgan drañs šiñ/ bdag ñid bcug nas 'jig rten dbañ
phyug señ ge sgra bsgom par bya'o/
(2.2.2) sku mdog dkar po spyang gsum pa/ ral pa'i cod pan gyis
brgyan pa/ stag gi bags pa'i bza' bsname pa/ señ ge dañ/

- zla ba'i gdan la rgyal po chen po rol pa'i stabs kyis
 bźugs pa źla ba'i 'od lta bu bsgom par bya'o/
- (2.2.3) phyag g'yas na sbul dkar po bkris pa'i rtse gsum dkar
 po'o/ phyag g'yon na padma lañs pa'i steñ na ral gri 'bar
 ba'o/ g'yon na me tog dri źim po sna tshogs pas gañ ba'i
 padma'i snod do/ rañ gi lus las de bźin gśegs pa lña 'phro
 bar blta'o/
- (2.2.4) de nas rañ gi sñiñ ga'i sa bon gyi sa ye śes sems dpa'
 bkug ciñ bcug nas de bźin gśegs pa rnamś 'phro źiñ bdag
 ñid la dbañ bskur nas/ 'od dpag tu med pas dbu brgyan
 ciñ/
- (2.2.5) rgyas btap par bsam par bya'o/ de nas sñags bzlas par
 bya'o/ lha rnamś kyi gzugs kyis so/ de la sñags 'di'o/ om
 āḥ hrīḥ siṃ ha nā da hūṃ phaṭ swāhā/
- (3.1) de nas mchod pa'i phyir dri bzañs la sogs pa'i mañḍala⁵⁸⁶
 byas la me tog la sogs pa dbul źiñ mchod par bya'o/
- (3.2) yañ phreñ ba'i sñags bzlas par bya'o/ na mo ratna tra yā
 ya/ na maḥ āryā ba lo ki te śwa rā ya/ bo dhi satwā ya/ ma
 hā satwā ya mahā kā ru ñi kā ya/ tadya thā/ om āḥ ka ṭe/
 bi ka ṭe/ ñi ka ṭe/ kaṭaṃ kaṭe/ ka ro ṭaṃ karōṭaṃ⁵⁸⁷ birya
 swāhā/
- (3.3) sñags 'dis mañḍala gyi gzugs bzuñ nas lan ñi śu rtsa gcig
 bzlas nas/ nad pa byugs na 'tsho bar 'gyur ro/
 'jig rten dbañ phyug señ ge sgru'i sgrab thabs rdzogs so//

581 P ins. ldan

582 P ham

583 P ba

584 P ham

585 D raṃ

586 P ins. la sogs pa

587 P om.

付 記

本稿は、平成二年度国立民族学博物館共同研究「南アジア諸パンテオンの表現方法」（代表者立川武蔵）の成果の一部である。

南アジアでは、主としてバラモン教、仏教（特に密教）、ヒンドゥー教において、神々、あるいは、諸尊の組織体（パンテオン）が形成されてきた。この形成過程において、神々の表出方法に変化がみとめられる。この研究では、特に観自在菩薩を取り上げ、その歴史的な変化を理解するための基礎的な資料を提示した。

原稿作成に際し、国立民族学博物館助教授永ノ尾信悟氏に多くの有益な助言を頂いた。記して感謝する次第である。

文 献

(1) 第一次文献

(1-1) サンスクリット文献

Abhidharmakośabhāṣya.

[PRADHAN 1975] 参照。

Aṣṭādhyāyī. Vol. 1, Delhi: Motilal Baranaisidass. Vasu, śrīśa Chandra (ed. and tr.) 1962 (first published 1891)

Guhyasamājantra

[MATSUNAGA 1978] 参照。

Katyāyana Śrauta Sūtra. the Chowkhamba Sanskrit Series No. 415, Benares: Pandit śrīvidyā dhara śarmā (ed.) Chowkhamba Sanskrit Series office, 1933.

Mahābhārata.

Vols. 16–18. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, for the first time crit. ed. by Sukhthankar, V. S. (and others) 1966, 1960.

Neṭpāla-rājakīya-Vīrapustakālayasthapustakānām Bṛhatsūcīpatram. Purātattvapraśāsanamālā 39. Kāthmāṇḍū: Vīrapustakālaya.

Rig Veda.

[AUFRECHT 1968] 参照。

Sāghanamālā.

2 Vols. Gaekward's Oriental Series Nos. 26, 41 Baroda: Oriental Institute. Bhattacharyya, Benoytosh (ed.), Reprint 1968 (first ed. 1925).

(1-2) その他

『大正新修大蔵経』 vols. 14. 19.

(2) 第二次文献

ALPER, P. Harvey (ed.)

1989 *Mantra*. New York: State University of New York Press.

アモーガヴァジュラ, ヴァシシュラーチャルヤ

1983 『ネパール百八観音紹介』高岡秀暢訳 百八観音木刻図像集刊行会。

AUFRECHT, Theodor (ed.)

1968 *Die Hymnen des Rigveda*. Vol. 2, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

BHARATI, Agehananda

1965 *The Tantric Tradition*. London: Rider & Lompany.

BANERJI, R. D.

1933 *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, Vol. 47.

BHATTACHARYYA, Benoytosh

1968 *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

BÜHLER, Georg

1901 Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.

BÖHTLINGK, Otto und Rudolph ROTH

1868 *Sanskrit-Wörterbuch*. St. Petersburg: Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften.

CLARK, Walter Eugene

1965 *Two Lamaistic Pantheons*. New York: Paragon Book Reprint Corp.

- CROOK, W.
 1910-1953 Charms and Amulets (Indian). In James Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol. 3 (BURIAL-CONFESSIONS) T. & T. Clark. pp. 141-448.
- FOUCHER, A.
 1905 *Etude sur l'iconographie buddhique de l'Inde d'après des documents nouveaux*. Part 2. Paris: Ernst Leroux. Editeur.
- EDGERTON, Franklin
 1970 *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 Vols. Motilal Banarasidass.
 エリアーデ, ミルチャ
 1981 「ヨーガ2」立川武蔵訳『エリアーデ著作集』第十巻 せりか書房。
- GETTY, Allice
 1962 *The Gods of Northern Buddhism*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- GRIFFITH, R. T. H.
 1896 *The Hymns of the Rigveda*. Translated with a popular commentary. Vol. 1, Benares: E. J. Lazarus and Co.
- GONDA, J.
 1980 *Vedic Ritual*. Leiden-köln: E. J. Brill.
- GOSHIMA, Kiyotaka and Keiya NOGUCHI (compiled)
 1983 *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Faculty of Letters, Kyoto University*. Kyoto.
- GRÜNWEDEL, Albert
 1970 (1900) *Mythologie des Buddhismus*. Osnabrück: Otto Zeller Verlag, Reprint.
- GUPTA, R. S.
 1980 (1972) *Iconography of the Hindus, Buddhists and Jains*. Bombay: D. B. Taraporevala Sons and Co.
- 逸見梅栄
 1935 『インドにおける礼拝像の形式研究』東洋文庫論集 20。
 1975 『中国喇嘛教美術大観』東京美術。
- HUNTINGTON, Susan L.
 1984 *The Pāla-sena Schools of Sculpture*. Leiden: E. J. Brill.
- 井狩彌介
 1989 「ヴェーダ祭式の思考と世界観」『インド思想 3』岩波講座・東洋思想 第7巻 岩波書店, pp. 49-64。
- ISHIHAMA, Yumiko and Yoichi FUKUTA
 1989 *A New Critical Edition of the Mahāvūyapatti*. Studia Tibetica No. 16, The Toyo Bunko.
 岩本 裕
 1978 『仏教説話の伝承と信仰』仏教説話研究 第三巻 開明書院。
- 金岡秀友
 1969 『密教の哲学』サーラ叢書 18 平楽寺書店。
- 小林太市郎
 1951 「執金剛と不動尊」仏教芸術学会編『仏教芸術』13: 53-79。
- 肥塚 隆
 1967 「瞑想と造形——インド美術における一つの基礎理念——」『南都仏教』20: 60-79。
- LIEBERT, Gösta
 1976 *Iconographic Dictionary of the Religions*. Leiden: E. J. Brill.
- LOKESH CHANDRA
 1986 *Buddhist Iconography of Tibet*. 2 Vols. Kyoto: Rinsen Book Co.
- 町田甲一(編)
 1968 『ニューデリー博物館』世界の美術館 9, 講談社。
- MALLMANN, Marie-Thérèse de
 1948 *Introduction à l'Etude d'Avalokiteśvara*. Paris: Civilisations du Sud.

佐久間 インド密教の図像学的資料(1)

- MATSUNAGA, Yukei
1978 *The Guhyasamājatantra*. Tokyo: Toho publication. (『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版株式会社)。
- MATSUNAMI, Seiren
1965 *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- MONIER, Williams
1899 *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: The Clarendon Press. Reprinted by Meicho Fukyukai Co., Ltd. Tokyo (1986).
- MUKHOPADHYAY, Santi Priya
1985 *Amitābha and his Family*. Delhi: Agam kala Prakashan.
- 長尾雅人・丹治昭義 (訳)
1974 『維摩経, 首楞嚴三昧経』大乘仏典 7 中央公論社。
- 中村 元 (編著)
1988 『図説仏教語大辞典』東京書籍。
- NATH, Amarendra
1986 *Buddhist Images and Narratives*. New Delhi: Books and Books.
- 奥山直司
1988 「チベット仏教パントオン形成に関する二つの課題」『印度学仏教学研究』36(2):886-892。
1989 「無上瑜伽類」塚本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文編『梵語仏典の研究』Ⅳ 密教経典篇 平楽寺書店, pp. 344-490。
- 大鹿実秋
1970 「チベット文維摩経テキスト」『インド古典研究 ACTA INDOLOGICA I』成田山新勝寺。
- POUSSIN, Vallée
1909-1953 Avalokiteśvara. In James Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol. 2 (ARTHUR-BUNYAN). T. & T. Clark, pp. 256-261.
- PRADHAN, P. (ed.)
1975 *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Patna: K. P. Javaswal Research Institute.
- 酒井紫明
1950 「密教芸術に関する西蔵伝訳資料概観」仏教芸術学会編『仏教芸術』7: 114-117, 毎日新聞社。
- 佐伯旭雅 (編)
1881 『冠導阿毘達磨俱舍論』法蔵館。
- 佐久間留理子
1990 「『サーダナ・マーラー』の梵文写本について」『東海仏教』35: 87-103。
- STAAL, Frits
1989 Vedic Mantra. In Alper P. Harvey (ed.), *Mantra*, New York: State Univ. of New York Press, pp. 48-95.
- SCHIEFNER, Anton
1869 *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus in Indien*. St. Petersburg: Commissionäre der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. Reprinted by Suzuki Gakujutsu Zaidan, Tokyo (1963).
- 清水 乞
1976 「インド宗教儀礼と造形——『サーダナ・マーラー』を中心として——」『日本仏教学会年報』43: 59-71。
1979 「後期インド密教図像と情趣論」『東洋学論叢』32: 21-69。
- 静谷正雄
1987 『初期大乘仏教の成立過程』百華苑刊。
- SKORUPSKI, Tadeusz
1983 *The Sarvadurgatipariśodhana tantra*. Delhi: Motilal Banarsidass.

立川武蔵

- 1978 「密教と呪術」『密教の理論と実践』講座密教1 春秋社、pp. 196-222。
 1983 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, *Shoḍaśa-upacāra-pūjā*. 『国立民族学博物館研究報告』8(1): 104-186。
 1986 「金剛ターラーの観想法」町田甲一先生古稀記念会編『論叢仏教美術史』吉川弘文館、pp. 65-97。
 1987a 「仏教図像」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬樹社、pp. 336-363。
 1987b 『曼荼羅の神々』ありな書房。
 1987c 『西藏仏教宗義研究』第五巻——トゥカン『一切宗義』カギユ派の章——(Studia Tibetica No. 13) 財団法人東洋文庫。
 1989 「マンダラ——構造と機能——」『インド仏教 3』岩波講座・東洋思想 第10巻 岩波書店、pp. 289-314。

高田仁覚

- 1978 『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会。

高島 淳

- 1989 「タントリズムにおける言葉の呪力」『インド思想 3』岩波講座・東洋思想 第7巻 岩波書店、pp. 139-155。

梅尾祥雲

- 1927 『曼荼羅及研究』高野山大学出版部。

辻直四郎

- 1983 『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫。

トゥッチ, ジュセッペ

- 1984 『マンダラの理論と実践』ロルフ・ギーブル訳 平河出版社。

VOSTRIKOV, A. I.

- 1970 *Tibetan Historical literature*. Soviet Indology Series No. 4, Calcutta: R. D. Press.

WADDELL, L. A.

- 1894 Polycephalic Images of Avalokita in India. *Journal of the Royal Asiatic Society*. Jan. pp. 385-386, pl. i-iii.
 1912 The 'Dhāraṇī' Cult in Buddhism, its origin, deified Literature and Images. *Ostasiatische Zeitschrift*. Vol. 1, pp. 155-195.

渡辺照宏

- 1982 「XXI Adhiṣṭhāna (加持) の文献学的試論」『渡辺照宏仏教学論集』築摩書房、pp. 459-555。

頼富本宏

- 1982 「ラマ教の美術」種智院大学インド・チベット研究会編『チベット密教の研究——西チベット・ラダックのラマ教文化について——』永田文昌堂、pp. 93-216。
 1989a 「仏教パネオンの発展形態」『人文学報』63: 79-91。
 1989b 「陀羅尼の展開と機能」『インド仏教 3』岩波講座・東洋思想 第10巻 岩波書店、pp. 315-339。

吉崎一美

- 1979 「Sāghanamālā 研究・資料編(1)」『東洋大学大学院紀要』16: 15-31。

ZIMMER, Heinrich

- 1984 (1955) *The Art of India Asia*. In Joseph Campbell (completed and ed.), Vols. 2., Delhi: Motilal Banarsidass, first indian ed.